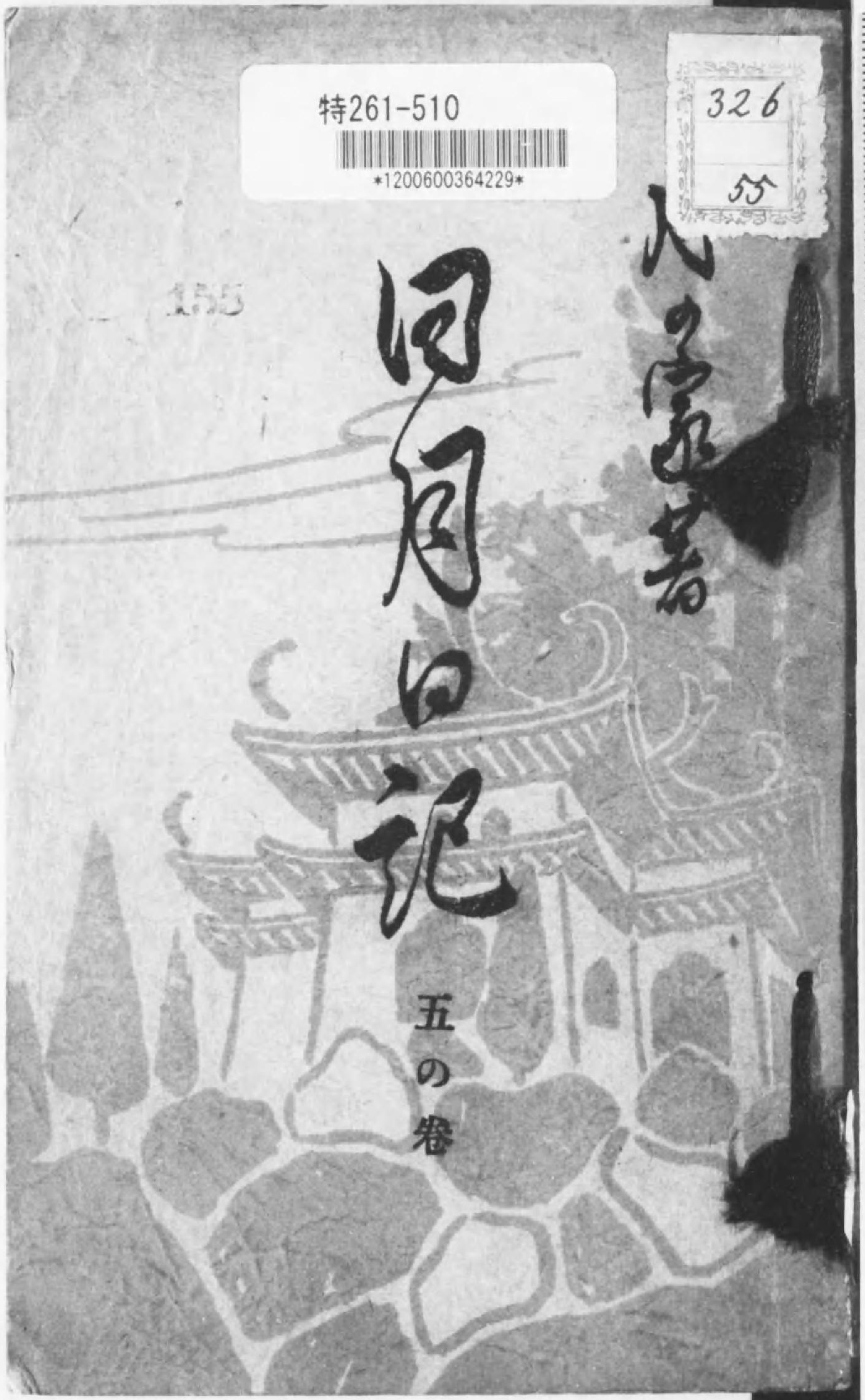
特261-510
1200600364229
326
55
155



回月日記

八の家流著

五の巻

始

月の家著

日月日記

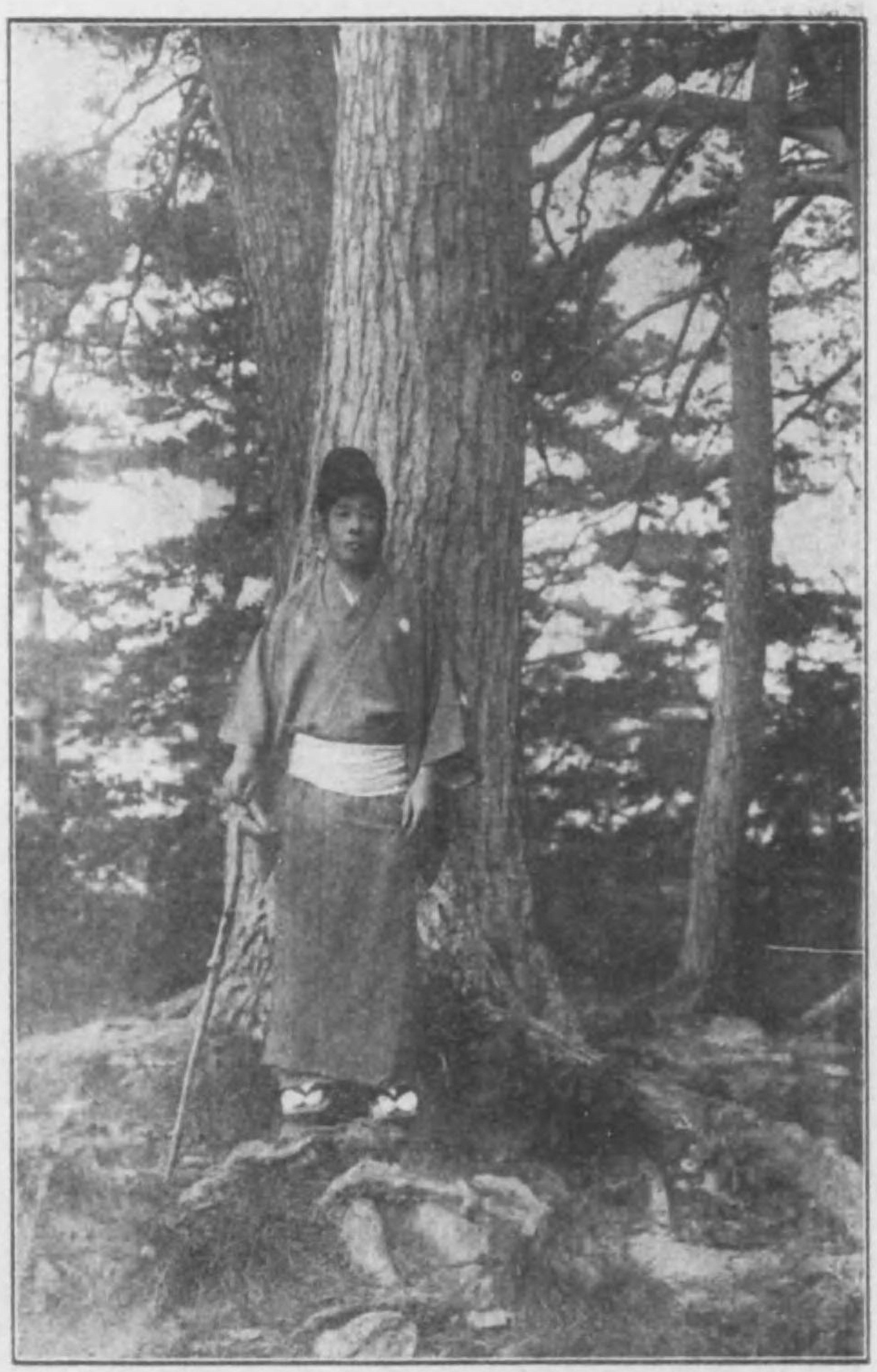
五の巻

昭和四年 自四月十九日 至六月三日

特261 510

帝國圖書館藏

昭和四・一〇・二 内交 帝國圖書館



【著者】出口王仁三郎聖師
（長野縣皆神山々上に於て）

日月日記　五の巻　目次

昭和四年四月

十九日　於高天閣及近江舞子……一頁
廿日　於松風閣……一四
廿一日　於高天閣……二六
廿二日　於高天閣……三七
廿三日　於高天閣……四四
廿四日　於教主殿……四五

廿五日於高天閣……五一
廿六日於高天閣……六〇
廿七日於高天閣……六六
廿八日於高天閣……七七
廿九日於高天閣……八八
卅日於錦浦館……九二

五月

一日於安濃津市古梅軒……一〇八
二日於中村邸……一一四
三日於高天閣……一二六
四日於高天閣……一三二
五日於三嶋別院……一三八
六日於高天閣……一四八
七日於教主殿……一五〇
八日於教主殿……一五二
九日於教主殿……一五三
十日於教主殿……一五五
十一日於教主殿……一五六

十二日　於高天閣……一五八
十三日　於高天閣……一六三
十四日　於三雲氏邸……一六四
十五日　於高天閣……一六八
十六日　於東海別院……一六九
十七日　於高天閣……一八〇
十八日　於高天閣……一八五
十九日　於明光殿……一八八
廿日　於高天閣……一九〇

廿一日　於三嶋別院……一九三
廿二日　於高天閣……二〇一
廿三日　於高天閣……二〇七
廿四日　於高天閣……二〇八
廿五日　於高天閣……二〇九
廿六日　於高天閣……二一〇
廿七日　於信洲諏訪支部……二一四
廿八日　於信州諏訪分所……二二六
廿九日　於甲府談露館……二三四

卅日　於淺間溫泉西石川旅館……二五一

卅一日　於筑摩支部……二五七

六月

一日　於北信支部……二六四

二日　於野澤町花屋旅館……二七九

三日　於長野市五明館……二八七

目次をはり

日月日記　五の卷

昭和四年四月十九日

於高天閣及近江舞子

朝未明月の宮居の高臺を吾靜行けば春風かをる
東の山の尾の上の雲別けて朝日おぼろに昇りましけり
花の香を送る春風浴び乍ら四方を望めば櫻の眞盛り

光照殿朝風呂に入り髭剃りて心も清しくなりにけるかな

午前九時松山檢事の呼び出しに從ひ八時龜岡發車す

平松氏閑月二人を伴なひて花咲く山野を東に進めり

停車場に明光社員宣信徒吾一行を見送りにけり

保津川の流れに寫る櫻木の花の姿の瑞々しきかな

危ふくも魔のトンネルの口越えて花に匂へる嵐峽に入る

嵐山花の眺めは一入に春の情緒をそゝらるゝかな

嵯峨の驛花見る客の比較的多からぬこそ寂しみの涌く

花に醉ひ酒に醉ひつゝ櫻見る人の脚元千鳥ヶ淵行く

大悲閣花に包まれ春の日に霞むが如く煙るが如し

渡月橋あたりの櫻早散りて赤き若芽の萠え出づる見ゆ

花匂ふ千葉の葛野の春の日は吹き來る風も長閑なりけり

船浮けて花を眺めし三年前の風雅の吾を思ひ浮べつ

所々松の木の間を彩りて匂ふ櫻の一入床しき

沿道の家々の軒に咲きほこる小さき櫻の花ぞしほらし

花園の驛にはあれど名のみにて常磐木の立つ妙心寺かな

漸くに二條の驛に下車すれば分所支部長宣使出迎ふ
二條驛ゆ自動車列ね丸太町地方裁判所へと出で行く
待合所に少時休らひ階上に松山檢事と面談を爲す
山格の事件に關し二時間の時費やして檢事局出る
神泉苑町大本分所に大和博士其他の諸氏と晝飯を爲す
晝飯を終れば一行九人連市中横切り蹴上に向ふ
逢坂山花を賞でつゝ大津市に進めば宣信出迎へてあり
疏水川渡れば數多の騎兵隊列をつくりて進み來れり

麗はしき花のさかりの三井寺に杖引く男女の珠數つなぎかな
右手に湖左手に白雲つゝみたる山並見つゝ滋賀驛に入る
のたり〳〵鏡の如き湖の面に巡遊船の浮べるが見ゆ
四明ヶ嶽うす雲の絹かぶりつゝ湖の面靜かに春風渡る
日吉驛過ぐれば左手に來迎寺櫻の花は今さかりなり
山下に靜かに煙立つ見えて雄琴温泉花ざかりなり
打ち寄する男波女波をあびながら堅田の驛に浮見堂うく
右左田園廣く菜種畑黄色に咲ける眞野の驛かな

水泳場廣く開けし眞野驛の湖邊に生ふる松のうるはし

和邇の村花のさかりに送られてスキー場のある比良口に入る

木戸の村水泳場を右に見て大物村に自動車下りたり

大物の區長其他に迎へられ公會堂に暫時休らふ

右左石材數多並びたる山路たどりて堤に至る

數千貫の石もて長く疊みたる百間堤に立ちて湖見る

三上山波のあなたに霞みつゝ蓬萊山の山おろし吹く

百間堀附近の地所を調べつゝ再び公會堂に歸れり

自動車を二臺ならべて比良の驛横ぎりながら雄松に着きけり

一行は近江舞子の濱の邊にたてる松風園に入りけり

松風園木の香かをりて新しき千尋の殿に安居せしかな

波なぎて鏡の如き海原を靜かに照らす夕日かげかな

松風園庭の櫻のまさかりを見んとや數多人の集へり

風光のよき別邸に案內され靜かに一夜の夢を見しかな

松風園千尋の殿の掛額に山紫水明と大書せしかな

宣信徒の依賴に應じ半切紙十數枚に大書せしかな

湖の音風の響も波の上長閑に照らす月朧なり
小夜更けて月は雲間にかくれつゝ湖の面に小雨そほふる

◇四月十九日　由外日報記事

江若鐵道沿線に建設せんとする

大本教會堂

●今●暫●く●考●慮●中●と●な●る●?

土地の繁榮と鐵道の進展を計り人口増殖を目的に江若鐵道沿線の滋賀郡木戸村では同驛附近の村有地約三千坪を寄附したので該地所に大本敎の敎會堂を建設する目論見で此程同鐵道會社專務代議士安原仁兵衞氏と出口王仁三郎氏と會見、大略の協定が出來たといふので、滋賀佛聯巡回講師の某氏が去る十五日その意嚮を確めるため安原氏を訪うた、元來佛敎最初の發祥地として我等は思想善導から見ても勿論不贊成である、何を苦しんで外敎を迎へるかと問うたが、安原氏の談では地方發展上の相談で別に宗敎を撰んだ譯でない、會社ではキネマ撮影場でも之に代るに然るべき物があるなら結構だから今一應村長と協議を仕直してもよいとの事でまだ確定せず目下熟慮中だと。

○聖師樣滋賀縣御巡遊記

京都　中　村　新　助

昭和四年四月十九日午前八時四十六分二條驛着列車にて聖師樣には平松大祥殿主任、林閑

月宗匠の随行にて御來京、分院に於て休憩遊ばさる。本日は御思召に依り一般信者には通知せず、驛には大和管事、栗辻管事補、中村理事長、三雲理事、荒川庶務次長の五名御出迎へ申上げ、分院御接待役として鎌光よね子、渡邊梅子、蒲生茂七 吉尾義一、守野夫人、加藤、菊池、瀬川、庶務係お蔭を頂く。

午後一時豫てより大和管事を通じて御願申上げある滋賀縣滋賀郡木戸村字大物、村長區長及村内協議員より献納方申出の別院候補地の御檢分の爲に御出張を御願ひ申上げ、隨行員の外京都より大和、栗辻、中村、三雲、荒川及地元關係者三條寺町三嶋照二氏の八名御供を許され、自動車二臺に分乘して蹴上、粟田口と東海道を山科、追分、走り井の大谷、逢阪山も過ぎて大津市札ノ辻につく。こゝには大津支部長西村氏を初め二十餘名神旗を打振り送迎申上ぐ。尾花街道を湖に添ひて菜種の花の眞盛り、又山裾の八重櫻の咲き誇る滋賀の里、在りし昔の名殘も哀れなる唐崎の枯松に佐馬介が湖水渡りに名も高き下阪本の新唐崎の松は繁

りて常磐の色深く聖師樣の御來駕を迎ふるが如し。比叡山麓の日吉の社の鳥居を左手に眺めつゝ縣下唯一の温泉場雄琴村に至れば苗鹿支部の大林宣傳使は支部長、次長、信者と自動車を仕立てゝ御待受け申し上げ、三十餘名送迎申上ぐ。此處より三臺の自動車にて八景の一なる堅田の浦傳ひに十曜の神旗を風になびかせつゝ和邇村、比良口を打ち過ぎて木戸村に入る午後三時大物部落には村長區長を初め村内役員等御出迎へ申上げ、村集會所に於て御休憩、折から西村大津支部長外三名は御後を慕ひ來りて一同村役員の案内にて候補地に向ふ。

候補地は比良山に水源を發する大谷川の上流にして水清く西に比良山の高峰 北に帆掛山、西北には油掛山を圍らし、前面は琵琶の湖を一望の裡に收め得る勝景の地である。更に大谷川の護岸工事の百間堤は有名なものである。遙に水莖の岡山、沖の島、又三上山(近江富士)等呼べば答へん許り。候補地は約七千坪程にて三丁程前に江若鐵道ありて、縣下の有力者にて同社社長安原仁兵衞氏も本別院地献納に關係あり。確定の上は此所に停車場を設置する豫定の

由。親しく御檢分も終り再び集會所に御小憩の上、三嶋照二氏の姉君が經營しつゝある近江舞子の稱ある雄松の湖岸に壯麗なる建築をなし江州の名所にせんと努力中の松風閣より御招待に依り再び自動車を走らせ午後六時に御到着。當閣主三嶋婦人は未信者なれ共豫てより御慕ひ申し、大和氏を通じて今日あるを御待ち申し居りし事とて大變に御氣持もよろしく京都より里程十二里餘を自動車にてお越し遊ばされ其の間御檢分の際は五丁餘の山道を徒歩にて上下遊ばされ、御疲勞も如何にと思ひ居りしに御入浴後も殊の外御機嫌御よろしく、折から御挨拶に伺ひし地元なる村の諸氏及安原氏等に御面會遊ばされ、御少憩の後松風閣主が用意の巾三尺丈一丈の大額を持出して御染筆を乞へば「山紫水明」と御認め遊ばされ、又半折十三枚扇子五本に御染筆村方の諸氏に御授け下され御快談ありて午後十時御就寢遊ばさる。

此の日大津、苗鹿支部員外に甲賀郡水口支部より福井支部長、小島、中村、鵜飼美生の諸氏、聖師様縣下に御越し遊ばされしと聞きて行程四時間、自動車を飛ばしてお伺ひ申上げた

かくて明日苗鹿及び大津支部に御立寄り下さる事となり、夫れ〳〵打合せの上御暇申上げ歸途に就く。

松風閣は昨年より建設したるものにして舞子の稱ある松林の傍にあり、湖岸は遠淺にして水清澄なれば、夏は海水浴場として都會人の來往も賑かなるべく今よりその繁榮を想はしむるものがある。座敷は十數ありて大廣間は百五十疊程敷かれ、舞臺もある大座敷にして、聖師様はこの座敷に御休息遊ばされ、又御面會もなさる。

閣主より雇人一同に至る迄聖師様を神様々々と申上げて御接待されしには一同も誠に有難く御神德を頂いた次第である。

滋賀縣苗鹿支部に於ける歡迎の一行と信徒

四月廿日　於松風園

近江舞子松風館に熟睡して右の腕蜂に刺されし

朝日影琵琶の湖水に漂ひて花紫の雲のつゝめる

長命寺山は霞の帯しめて琵琶の湖水にかげを落せり

新しき木の香の薫る廣殿に山水の景を眺めけるかな

油をば流せし如き湖の面を發動汽船のけたゝましく行く

苗鹿支部長河井氏始め大林宣使早朝迎へに來る

松風園主の好意に琵琶の鯉皮羊羹を贈られにけり

マッチ箱通ふ鐵道横切りて苗鹿の支部に入りにける哉

神殿に拜禮濟し半切や短冊等に筆を染めたり

支部員の依賴に應じ庭先に立ちて一同小照を撮る

常磐木の茂る小山を背に負ひ東に琵琶の絶景を見る

雨そぼつ田の細道を傳ひつゝ大道に出でて自動車に乘る

右手は花左手は湖の近江路をい走り行けば騎馬隊に會ふ

櫻花菜種の花の匂ふ野をうらたのもしく春風浴びゆく

落雁に名を知られたる堅田崎浮見堂がり漁舟浮べり
紫の雲か霞か三井寺の花の盛のうるはしきかな
まゝならばこの櫻木を何時までも匂はせ度しと思ひけるかも
右左櫻の花に送られて滋賀の大津に入りにける哉
風致よき紅葉館の大殿に信徒ともに入りて休らふ
風荒み波たかまりて湖の面もの騒がしくなりにけるかな
しつかりと春を抱へて花笑ひ
さざ波の滋賀の浦輪の紅葉舘に春の彌生の花を見しかな

春風の長閑にかをる湖の面に花びら散らす紅葉舘かな
縣廳の役員信者訪ね來て短册揮毫請ひて歸れり
三四人各新聞の記者來り吾小照を撮りて歸れり
宣信徒依賴に應じ半切紙色紙短册五十枚書く
雨そほつ紅葉舘を後にして大津の支部に車馳せたり
大津支部神前祝詞奏上し自動車馳せて歸國の途につく
右左櫻の薫る逢坂の雨の闘路をひた走りつゝ
蟬丸の神社の邊り櫻花早くも散りて葉櫻匂へり

櫻花に名を知られたる京都市の動物園ははや散りてあり

雨そほつ花の都を横ぎりて月の桂の橋を渡れり

川勝寺岡村沓掛村越えて大枝の坂にさしかゝりけり

大枝坂櫻の花のまさかりに匂へる中を上る床しさ

大枝坂峠の櫻むら〳〵と雲の如くに空に匂へり

トンネルをくゞればこゝより下り坂丹波の國の櫻みるかな

梨の木の峠を右手に眼鏡橋渡れば櫻のトンネルに入る

大空に雲はあれども櫻木の花あきらけきくらがりの宮

くらがりの宮の笠松すく〳〵と南桑の野を看守りてあり

篠村やひろみち馬堀乗越えて柏原並木の松原よぎる

大津より一時間半費して天恩郷に自動車かけ入る

天恩郷歸りて見れば宣信徒觀音松の下に迎へり

大津より自動車にて吾を見送りたる人々は粟辻、中村、三雲、西村、堀江の五宣傳使にして、京都まで同車見送りたるは大和博士なりき。こゝに一同の好意を感謝す。

午後の五時三十餘名の面會者に短册一枚づゝをおくりぬ

おぼろ月空にあれども眠たさに高天閣に入りてねしかな

花匂ふ彌生の春の花明山高臺後にして、花の都と名に負ひし京都市に、或る官の呼び出しに由りて上るべく、龜岡の停車場に向へば、物言ふ男花と女花の波を打ちつゝ、吾一行を見送るあり。停車場の並木の櫻は今を盛りと咲きほこりつゝ、春の情緒漲る中を平松宣傳使、花も耻らふ閑月女史の明眸皓齒三人連れ春風戰ぐ南桑の野を縫ひ行けば、花明山高臺月宮殿は漸くかすみて山本請田口に到る。山裾の櫻花爛漫として保津の溪流に映ゆる狀、何んとも形容の詞無し。谷々に散在せる山櫻花の淡き香に送られ乍ら、汽車は速くも嵐峽館の直前に進む。嗚呼嵐山の櫻花よと仰ぐ間もなく、情なき汽車は殺風景極まる暗きトンネルに吸ひ込まれ、花より團子の嵯峨驛に入る。車窓遥かに嵐山を見渡せば今を盛りの花の峰、緑の松の木の間を彩りて長閑に匂へる狀、恰も花屛風を大空に引き廻したる心地なりき。

花に情なき吾汽車は汽笛の聲に促され一目散に花園に向つて進行を續けたり名は花園の驛ながら餘り櫻の美はしき眺めも無く、二條の驛に下車すれば京都市の宣信徒自動車を用意して吾一行を待てるに會ひ、大和通伸博士粟辻分所長中村宣傳使その他と共に白き櫻花の寂しく咲き匂へる京都地方裁判所檢事局松

山檢事の室に入り、面談二時間にして再び神泉苑の瑞祥會分所に入り晝飯を振れ舞はれ、午後一時より又ちや自動車を列ねて三條通りを東に、インクライン動物園平安神宮なぞの名所をながめつゝ、吾待つ人に逢坂の關の山路を突破して小波の志賀の舊都大津の町に入るや、宣信數多神旗を打振り十字街路に迎ふるあり。明日の再會を約して花の盛りを三井の寺、心も堅田の里を越え麥生の青畑や菜種の黃金畠櫻の山や林に送られ、琵琶の湖水を右手に見て和邇の濱村日吉の里漸く越えて大物の田舍い村に着きにけり。

大物の區長其他に迎へられ區會議所に入りて村の重立ちたる人々に面會し靈

場建設に就きて敷地の相談なぞ少時試みつゝ、區長等に案內されて有名なる百間堤の傍なる山林を視察せり。土地は石を亂掘せし跡にて荒果てたれども、近く前方を見れば琵琶の湖の水愈碧く白砂青松の濱連りて空を蔽ふ如く三上山は遠く湖水を隔てゝ昔乍らの雄姿を現し、水天髣髴の間に浮ぶ。松籟自然の音樂を奏し、溪水潺々として自然の風光を囁く。前面遙に青岱と碧波相接する所白帆點々として蝶の如くに散走す。呼此自然の大藝術に陶醉して自ら心身を淨め人生の修養に資するの點最も好適の地點たる可し。吾初めて江州の風光に接し恍惚として去る能はず、思ひを遠く神代の嚴瑞二神か天の眞奈爲の誓約

に馳せ懐古の念頻りなり。次で山を下り近江舞子の稱ある雄松の湖岸に新築されたる大建造物松風園に到れば未だ木の香新しく庭の面に櫻花爛漫と咲亂れ、白砂青松を以て彩られたる鏡の湖面波緩かに春の神秘を謳ふ狀天國に似たり。

○聖師様滋賀縣御巡遊記

京都　中村新助

昨日夜來の雨もからりと晴れて午前八時三十分苗鹿支部大林宣傳使は自動車二臺を差し廻して御出迎へ申上げ、午前九時二十分園主以下御見送りの中を苗鹿支部に向はせられ、十時前御出迎へ申上げし信者三十餘名と共に支部に御着遊ばされ、唐紙全紙に詩と富士山とを御染筆遊ばされ、半折四枚、大判紙十枚、短册二十六枚に御染筆、支部員に御授け下さる。又同

家の襖にあやめの繪を一面に御染筆遊ばされた。

苗鹿支部河合氏宅にて記念撮影を御願申上ぐ。それより聖師様御先達に依り一同支部御神前に御禮奏上、午前十一時同支部御出發大津に向はる。河合支部長、大林宣傳使及次長の三氏大津迄御見送り申上ぐ。

大津市濱通り紅葉館に於ける大津支部の休憩所に午前十一時三十分御到着、濱側大廣間にて御休憩の暇もなく半切十三枚、色紙三十枚、短册十枚、墨及繪具にて書畵を例の大速力にて御染筆遊ばされ、支部員一同、水口支部員に御授け下さる。大毎大津支社、江州日々新聞社、名古屋新聞社、大朝大毎大津支社、滋賀新報社の記者續々訪づれ親しく御面接申上げ色紙短册等を頂き、大朝社寫眞班も亦來る。大津稅務課長外四五名の士來り親しく御面會申上げ夫々色紙を頂かる。

午後二時石川町大津支部堀江方に御越し下され神前にて御禮奏上、御少憩の上自動車にて

三條街道を經て一路天恩郷に向はる。途中梨木峠、老の阪の谷間の櫻咲誇れるは旅情を慰めまつるに充分であつた。午後四時半御機嫌よく高天閣に御歸り遊ばさる。

四月廿一日　於高天閣

西南の風吹きすさび高殿をめき〱ゆする騒がしの朝

大暴風雨吹きすさびつゝ大祥殿棟の瓦を木の葉と散らせり

彼方此方の硝子窓をば破壊して過ぎゆく疾風のにくらしきかな

ライオンのほゆるが如き風の聲にもろくも散りぬ山櫻花

西南吹く大風に雨まじり今年植ゑたる檜にあたる

龜岡の町のあちこちほゝゑめる櫻の花はもろくも散りたり

風すさび雨しげくして高殿を一足も出でず和歌を撰りたり

今日も亦冠句の巻の奥がきをしたゝめにけり五冊ばかりを

東京の梅田氏主人はる〲と天恩郷に詣で來れり

大和博士家族一同粟辻氏高天閣に吾を訪ひゆく

龜年館落成祝ひと結婚の披露の宴にまねかれてゆく
西南の風西北にかはりけり午後三時頃よりいともはげしく
松檜などの植木にそへ杖をしばりて暴風しのがせけるかな
たそがれて風も漸く吹きやめば十二夜の月空に輝く
龜年館大震妻の餘波受けて狂ひ出したり西南の風
昨日より吹き荒びたる暴風は西北さして向きをかへたり
碌々に寢られざりけり西北の風高殿の夜窓たゝきて

◇四月廿一日　大阪朝日新聞滋賀版所載記事

『湖國の布教は
一番後廻し』
木戸別院敷地を檢分して
出口王仁三郎氏の氣焔

別院建設のため信者から提供された滋賀郡木戸村字大物の敷地下檢分とあつて京都支部長大和博士等多數信者を隨へて二十日來縣した大本教聖師出口王仁三郎氏は敷地の檢分を終へ正午前大津紅葉館に少憩、男女多數の信者等に取卷かれながら矢繼早に數十種の揮毫をやつて精力絶倫なところを見せ信者らをアッといはせたが、色紙の一枚には『戀人を心の隅にそつ

と秘め』などゝ害きなぐつて一同を笑はせた。側近には若い侍女をはべらせ、眞赤な布團を敷いて尊大に構へてゐるところ聖師に似つかはしい樣子だつた。例の調子で語り出す氣焰は聞けなかつたが別院建設問題について次の如く語つた。

『近江の國は神樣とは深い關係はあるが布教は一番後廻しにしたので信者は極めて少ない。こんどは木戸村の信者約三十名が別院建設の敷地六千坪許りを寄附してやらうといふので下檢分をしたのだが、琵琶湖に面した景色のよいところだし、水も綺麗なので氣に入つた。まだ寄附を受けるか、別院を建設するかも決めてゐないがよく考へた上で寄附を受けると決れば私の方で建物は拵へなくてはならんと思ふ。從來の慣例からゆけば敷地の寄附があれば建物も建てゝくれるのだが……また江州人は

物質慾が強くて宗教的には惠まれてゐない』

然し大本教の信者の少ない割に天理教がよく布教されてゐるが、大本教は金儲けは授けないのかと聞けば大笑しつゝ、

『どの神樣でも信ずれば自ら金は儲けさせてくれる』

と結んだ。それより晝餐をしたゝめたのち多數信者らに送られて午後三時ごろ綾部へ歸つた。なほ木戸別院の敷地は江若鐵道沿線比良驛から十町の山手だが、いよ／＼別院建設が決定すれば會社側では特に別院所在地附近に停車場を開設し、村民等は參詣道を設けるとのことである。

◇仝日　名古屋新聞京都滋賀附錄記事

比良山麓木戸に
大本敎の殿堂出現か
大和博士を随へ大津へ立寄つた
出口王仁三郎氏の話

大本敎の出口王仁三郎氏がひよつこり廿日午前十一時大津に來り多數男女の信者に迎へられて大津紅葉館の廣間に陣取つた。正午大本敎理主として信者尊敬の中心になつてをる出口氏を紅葉館に訪ねると、たま〳〵多數の信者が求めるまゝに半折や色紙に大いに染筆をきそひつゝあつたが出口氏は快よく迎へて次のやうな話を極めて平凡に極めて磊落な調子で語るのであつた。その風態を見ると黒羽二重地紋入の着物に對の羽織を重ね下着

には紫がのぞいてをる。頭は長い髪を網の目のやうな頭巾で前高につゝみ込むといふちよつと風變りな体裁をしてをるが、頭の形はかつて問題を起した當時の王仁三郎氏そのまゝである。

『今日滋賀郡木戸村字大物の信者が寄附しやうといふ同地六千坪位あるであらう）を見に行つてその歸り大津に脫線して斯うして色々の繪や書を書かされてをるのである。百間堤は比良山の麓にあつて非常に水の美しいところである。神樣はそれを御採納になるかならぬかまだ判らないが採納になれば大本敎の方からお金を出して色々の建設をすることになり、土地として繁榮を見る譯である。各方面から土地及び建物の寄附採納を願ひ出るものが隨分あつても神樣の氣にいらないところはふり向きもしないでそのまゝになつてをる。數年前野洲郡の方で六萬坪からの土

地を寄附するからといふ申出であつたがそのまゝ行つて見たこともなかつた。今度大物の方へ行つたといふのは大体滋賀縣が古事記にもあるやうに、神様と因縁の深い土地柄であるので出て來たのである。滋賀縣は元來色々の宗教が生えつき憎い土地柄であるので大本教としても一向信仰の手を擴めて見たこともなく後廻しになつてゐたのであるから信者の數は固より澤山ない。これからおひるを食べて綾部に歸るのだ』

と語り、くりかへして水のいゝことをほめてゐた。なほ京都支部長醫學博士大和通伸氏は付け加へて語る。

『多分大本教で殿堂の建設を行ふ事になるでせう。土地としても大變いいところである。場所は江若鐵道木戸比良兩地の中間にあるので、江若鐵道の方においても中間に驛を造つて道路をつけることになるでせう』

◇仝日　近江新報所載記事

大本教々會設置に

王仁三郎氏來る

大本教々主出口王仁三郎氏は十九日來縣し滋賀郡木戸村大字大物に信者が設置せんとする教會の敷地を視察し松風閣に一泊の後二十日歸つた。王仁氏は

滋賀縣へは二度程遊びに來たことはあるが大本教のために來たのは今回が初めてゞある。木戸村に教會を設置し西江州布教の根據地にしたいと思つてゐる。滋賀縣は本部に近いにもかゝはらず他に比して著しく信者が少いが今後相當ふえると思つてゐる…………云々

と語つてゐた。

◇仝日 江州日々新聞所載記事

出口王仁三郎氏

大本教主補出口王仁三郎氏は木戸村別院敷地検分のため過般来滯在中。

四月廿一日　於　高天閣

朝まだき起き出で見れば北の風角笛吹きて高臺過ぎ行く

今日一日休養せんと思ひつゝ又も色紙や短冊を描く

紫に三葉躑躅は咲き匂ふ

嵐吹く花明山高臺風冷えて春の日ながら綿入れを着る

花明山の櫟林の枝搖れて自然のダンス風に見るかな

咲きほこる四邊の櫻散らしつゝ情なき嵐吹くぞ憎らし

丹波路の春長かれと祈りてし甲斐もあらしに掻き消されけり

南桑の野を飾りたる櫻木の花は嵐にもろくも散りけり

春深み四方の櫻は散りぬれどお多福櫻は未だ蕾なり

松翠はや三四寸伸び立ちて花明山高臺陽氣漲る

矢田神社森の櫻も夜の間に見る影もなく散り果てにけり

雷鳴の轟く如く風吹えて吾庭の面の檜の木の枝揉む

若緑霜に痛みてあはれ氣に風に震へり高殿の庭

色々の躑躅は庭にあり乍ら三葉つゝじの外はつぼめり

龜年館慶事も濟みて西北の嵐に四方の櫻散り行く

敷嶋の道を傳ふる明光の殿の奥庭躑躅笑み初む

近き間にお多福櫻も匂ふらん一日一日に蕾のふくるゝ

西北の嵐に逢ひて龜山の溪間の堀端櫻散りけり

引きも切らず吹き來る嵐に神苑の植木の小搖れ氣遣ふ今日かな

三吉野の花も大方散りぬらんレコード破りの強き嵐に

伊賀さんの家から地震始まりて花明山神苑大嵐吹く

隆々と昇る朝日の光りさへ包みて低し紫の雲

一日の間に櫻はかはり行きて若芽の萠ゆる花明山神苑

産土の小幡の宮の遲櫻一本春を殘して吾待つ

國の花と名を負ふ吉野の櫻花も散りては春を訪ふ人も無し

澄み渡る彌生の空の風寒く庭の面靜かに躑躅匂へり

月夜見の神は嵐の夜櫻を微笑みながら見そなはすらむ

温みたる小川の流れに花片の散りて流るゝ夕べの淋しさ

吹く風に果敢なくも散る櫻花の姿し見れば人生寂しき

武藏野の櫻見んとて樂しみし希望も嵐に夢と散りけり

夢なれや昨日の日まで爛漫と春をほこりし櫻今無し

類例も無き大嵐吹きすさみ惜しくも嵐の櫻散りけり

牛の聲長閑に田の面に聞えつゝ花の香送る春の山風

艶麗な花よと見上ぐる間もあらず昨夜の嵐に脆くも散りたり

景色佳き花を見降ろす高臺も今日は葉櫻計り見しかな

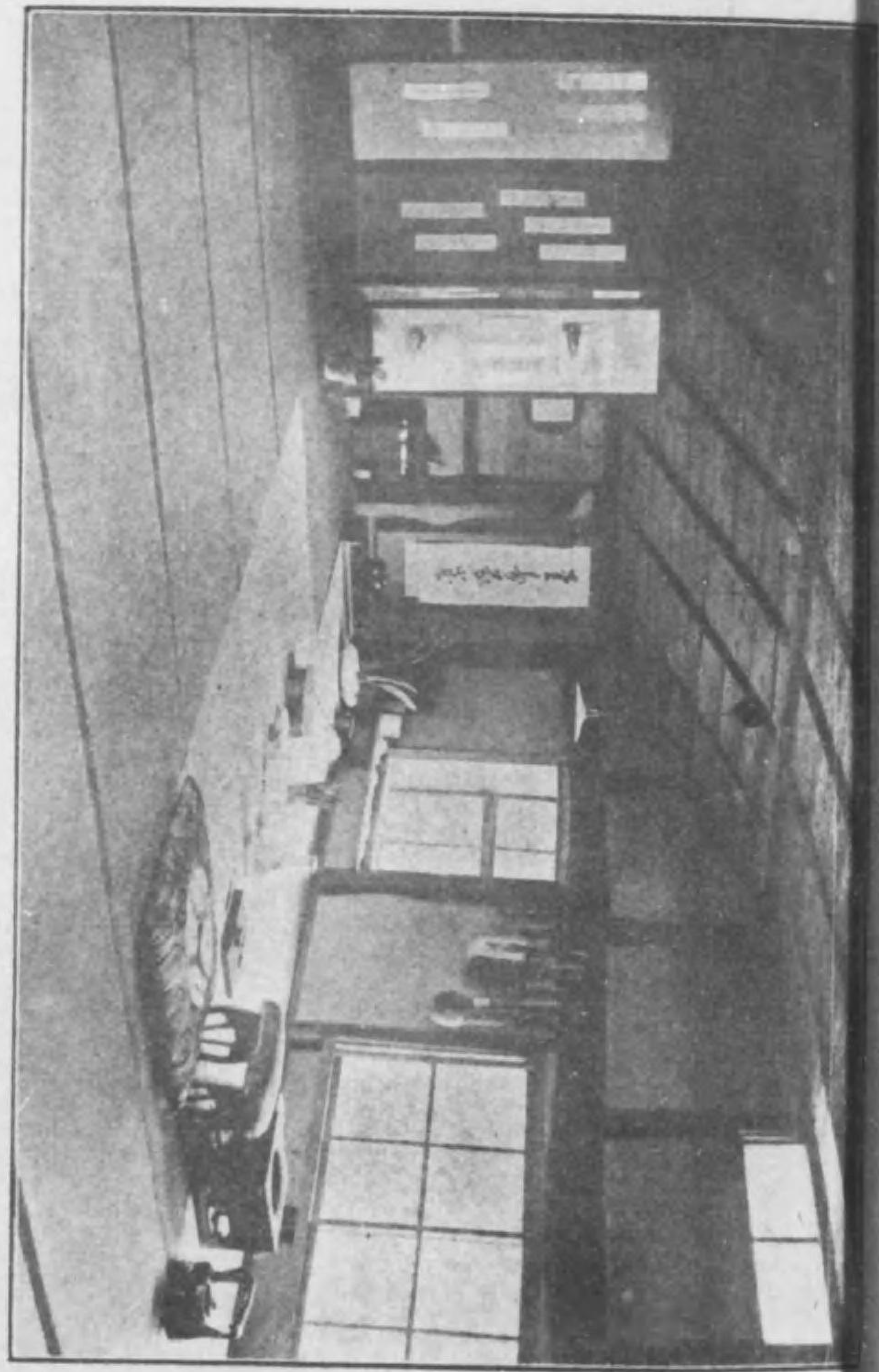
瀬釣りする人の彼方此方見え乍ら土堤の櫻の匂ひ初めつゝ

天恩郷唯一本の櫻木は南桑の春の艮めと咲くなり

根に含む力は漸く春深み翠となりて萠ゆる神苑

平和なる姿なるかな花匂ふ樹蔭に妹と酒くむ春日は
眼に觸る丶物は殘らず新しく蘇りたる彌生の野邊かな
笑顔して櫻を手折る白魚の手に春の日のかゞやく朝かな
連峯の頂き花にかすみつ丶春は更けたり天恩の鄕
遠近の山は櫻に包まれて吹く春風の薫ばしきかな
大嵐吹く宵闇の幕明けて照る電燈に花の散る見ゆ
此處彼處三味線太皷の音も冴えて唄長閑なる春の山かな
そよと吹く風さへ花に惜まるを靜心無く吹く嵐かな

鳥が啼く吾妻の友も交はりて今日を盛りの花を見るかな
長閑なる彌生の空を閉しつ丶村雲立ちて花散らす雨
ほの〴〵と春のあしたに起き出で丶高臺に立てば野は花霞めり
百鳥の聲も長閑に庭の面の躑躅に戰ぐ風柔けし
世の中に更生氣分を漂はすものは彌生の翠なりけり
老幼の區別さへなく櫻咲く花の蔭の長閑なるかな
折々に思ひ出だして樂もしく暮らすも櫻の在ればなりけり
お多福の櫻匂へば今年も祥明館にて歌樂しまむ



高閣に於ける出口聖師の両室月光峯

四月廿三日　於高天閣

梅田氏の家族一同と竹内氏今日東京をさして歸れり

新潟の支部の風害見舞とし電報うてば返電來る

内蒙軍高等顧問委任すと總司令部より辭令書屆けり

穴太なる小幡の宮の上田氏は觀櫻會を報じ來れり

明光社景品短冊八百枚黄昏頃より描きけるかな

今日も亦冠句や和歌の巻五冊漸くにして書き終りけり

小夜ふけて月光寮に出張し繪の半切を數多書きたり
穴太より齋藤大工うち招き寫眞館建築註文を爲す

四月廿四日　於教主殿

一片の雲きれも無き大空を照らしてのぼる朝日かゆかな
かすむ如煙るが如く立ちのぼる眺め淸しき保津の川霧

月宮殿庭のしげみに斑鳩の朝日浴びつゝ群り遊べる

神苑の櫟林はめつきりと青づき初めて朝日長閑けし

朝七時の汽車にて綾部に歸らんと手荷物用意にいそがしき哉

宇知麿や澄月雄月伴ひて龜岡驛に自動車馳せたり

停車場に來りて見れば穴太より參綾せんとて生母待ち居り

朝日照る麥生の野邊の中道を心清しく進みてぞ行く

知らぬ間に八木の驛路を乘越えて氣がつき見れば鳥羽の里なる

風薫る花の園部に來て見れば櫻淋しく梢に殘れり

朝日影空うらゝかに照り映えて山野はおぼろにかすみ初めたり

園部川清き流れに藪かげの深く沈みて花びら流るゝ

散り殘る花の梢の淋しさに春の深さの知られけるかな

窓外に風無く朝日輝けど何かは知らず肌冷え渡る

山かげの寫れる世木の川堤自動車乘りて走る人あり

山々に靄立ちこめて朝日かげおぼろに輝く殿田驛かな

山裾の一つ家の軒に白桃の今を盛りと花の匂へる

此のあたり山家のせいか櫻木の彼方此方に花盛りなり

小學校庭の櫻木半ば散り朝日に映ゆる胡麻の驛哉

老松の一本たちて風清く陽はうらゝかな下山の驛

山々の彼方此方にちら／＼と紫つゝじの朝日に映ゆ見ゆ

和知川の清き流れに朝日かげ輝き渡り水底淺めり

八重櫻紅梅の花咲きほこり朝日に匂ふ和知の驛かな

常磐木の松の林のあちこちと殘る山邊の風致よきかな

名に高き山家の驛の櫻木はすげなく散りて若葉萠え立つ

水清き小雲の川の鐵橋は早竣工の勇姿あらはす

丸山の一本櫻は散り果てゝ梢眞赤く若葉萠ゆ見ゆ

和衣の綾部の驛に下車すれば信徒數多出迎へてあり

一行は自動車馳せて西門に歸れば此處にも信徒出迎ふ

神苑の木々の梢は萠え初めて池の面に春風そよげり

六合大が第十五回の靈祭を金龍殿に勤行せしかな

金龍殿祭典終り離れ島の六合大神社に詣でけるかな

山駕籠にかつがれ乍ら一ノ瀬の奥都城さして詣でゝ行く

教御祖奥都城の前にひざまづきいと厳かに神言を宣る

奥都城の庭の小松をひき抜きて大道清くひらきけるかな

一ノ瀬の大本所有の敷地をば一々巡り検べてしかな

山駕籠にかつがれ乍ら坂下り一ノ瀬耕田巡り見しかな

空曇り降りみ降らずみ雨ありて晴着の衣装氣遣はれける

教主殿歸りて見れば午後の二時客饗應の最中なりけり

四月廿五日　於高天閣

もや包む大本西門立ち出でゝ歸龜せんが爲停車場に向ふ

澄月や雄月伴ひ朝三時汽笛の聲に綾部驛たつ

一本木踏切りあたり信徒等提灯ふり〳〵吾を見送る

忽ちに睡魔に襲はれ夢の國辿りて覺むれば龜岡の驛

信徒に出迎へられて天恩の郷に早朝歸りつきたり

神苑のあなたこなたを見巡りて樹木の整理命じけるかな

彼方此方に散在したる臺石を高天閣の庭に据ゑたり

空清く日はうらゝかに風冴えて心地よきまゝ神苑さすらふ

幾度も月宮臺を經巡りて春の氣分にひたりけるかな

今日も亦歌や冠句の卷の奥八冊ばかり書きしるしけり

穴太より齋藤大工招ぎよせて智照寫眞館敷地定めぬ

木鋏をたづさへ枯れし釋南木月宮臺よりとりのぞきけり

日出麿は高木總務と夕暮に木津方面ゆ歸り來れり

日出麿は高木氏從へ夕暮の汽車にて綾部に歸りてぞゆく

朝晴の空清くして高臺の檜の森に斑鳩の啼く

龜山の高殿に立ち四方見れば天津神國のしのばるゝ哉

冴え渡るみ空の下に綿の如く浮ける山野の清らかなる哉

丹波路の要とあれし花明山の春の眺めはことにさやけし

眺むれば四方の山野は霞みつゝ自然の畵帳のべし樣なり

春風に吹かれて月の高臺に立てば一入心長閑けし

松の翠早や二三寸たちのびて春は漸く暮れんとぞする

山笑ひ谷川の水ぬるみつゝ筏に殘る櫻の花びら

嵐山の櫻はもろくも散り行きて梢に殘る葉櫻の色

忘らへぬ去年の花見を思出し今年も宮の櫻訪ねん

石垣のすき間を縫うて春草のあちこちのぞく樣ぞ床しき

木々は皆水氣たちつゝ新しき芽をふき出でゝ春はたけたり

白妙の衣の袖はかをりけり昨日も今日も花に遊びて

千早振神代のまゝに色かへぬ花は女神の姿なるらん

賑はしくなりにけるかな冬枯の櫟林に若芽萌え出て

高臺ゆ見れば保津川南桑の野を南北に分けて流るゝ

日守木の銀杏の下に立ち寄れば何處の人か佇みてあり

みはるかす愛宕の山のうす霞分けて來にけむ鳶の高舞ふ

幾千度見れどもあかぬ高臺ゆ四方を眺むる珍の景色は

リリーの花色白々と吾床に匂へる樣のしほらしきかな

古の龜山城は三五の聖場となりて百花匂ふ

麗はしき吾龜山の眺めこそ月の御國の姿なるらん

國見峠夕暮たちて眺むれば保津の電燈火の海に似し

澄み渡る月の光に月の宮浮べる如し白雲の上に

月の光朧に照りて春の夜の櫟の森にふくろふの鳴く

○

主を待つ春の夕べの暮れ難く又明け易したまにあふ身は

故郷の苑の櫻は咲きぬらん西吹く風に袖の匂へば

麥の畑日に〱青く繁りゆきて終日空に揚雲雀なく

夢の國たどるが如き心地かな月朧なる春の龜山

薄霞たなびく愛宕の山上に紫に映ゆ朝日光かな

繪巻物繰りひろげたる如くなり花のにほへる春の龜山

領國の美人も中に交はりて小幡の宮のおそ櫻見る

せゝらぎの音も靜かになりゆきて花咲く春の夕陽落ちゆく

天恩郷の四季の眺めはよけれども春の朧の月夜愛でたし

ねもごろに神の教を宣り傳ふ大祥殿の春は長閑けし

平和なる神の御國の姿かな花散る夕のおぼろの月光

目にふるゝものの皆新しく思ふ哉春の彌生の山野の姿は

厭離穢土なりとは聞けど花匂ふ春の地上はいとも淸しき

靈國の姿をうつす花明山の高臺の上に月は冴えたり

餌をあさる軒の雀の囀りも長閑に聞こゆ彌生の春哉

大枝山谷の櫻の眞盛りは都の春も如何で及ばん
この花の匂ふ夕べの月光を仰げばきみの偲ばるゝ哉
そよと吹く風にも花の匂ふなる春の夕べは心たぬしき
遠山はかすめど近き山々は花曇りして吹く風かんばし
長閑なる春の夕べの月光を松ヶ枝にかけ一人見し哉
星かげもまばらにかすむ春の夜の御空の月に心しづけし
百鳥の鳴く聲さえて野に山に花の薫の賑はふ春かな
終夜(よもすがら)花にあこがれ月戀ひていぬる惜しさにあけはなれけり
ろうそくに火を点じつゝ緣側に友と夕べの庭の花見し

お多福の櫻の花の散りゆけば春の女神は夏に去りゆく
三女神現れ給ふ琵琶の湖(うみ)團扇涼しき竹生島かな

○雅號讀込み

明月は歸らず月は空に冴え
東雲を喰らへど夜るは未だ明けず
明月の留守居や松月北斗星
色紙やかれ腹が立田の氣は紅葉

四月廿六日　於高天閣

朝早く起き出で川芎藥湯に浸りて身体ぬくめけるかな
浴槽にて安全剃刀使用なし右の小鼻を切りて血を出す
高臺の植木のしげみに群雀集ひ囀る聲のやかまし
珍らしく朝霧晴れて風もなくあたり靜けき龜山高臺
京都市に出張せんと朝八時王月恒月伴ひて行く
明光社宗匠四人朝八時龜山發し京都に向ふ

振り返り龜山高臺眺むれば庭木の杜に春色漂ふ
大公孫樹梢に若葉もえそめて龜山高臺ながめすがしき
柏原の並木の松原のり越えし汽車は山本さして流るゝ
請田口溪の清流眺むれば長蛇の如き筏ながるゝ
山櫻散りし梢に赤々と萠ゆる若葉の水に映えつゝ
淙々と飛沫をとばす谷川の早瀬の音のいさぎよきかな
右左新綠もゆる谷間の鐵路走れば風の淸しも
繁山の頂朝日照り映えて青葉かゞやく保津の谷間

嵐山櫻の花は散り果て、萌ゆる新緑色淺きかな

龜山の暗きトンネル走りぬけ花より團子の嵯峨驛に入る

遲櫻二株三株まだ殘り春を偲ばす嵯峨の驛かな

花園の驛のまぢかの松山の中より覗くおそ櫻花

妙心寺甍も高く聳えつゝ朝日をうけて輝く花園

一行の二條の驛に下車すれば京都の信徒出で迎へ居り

明光社宗匠連と別れつゝ二條の驛より自動車走らす

神泉苑池の汀の大本の分所の庭に安く着きけり

午前十時自動車馳せて裁判所檢事局へと出張せしかな

天聲社盜難の事に相關し小山檢事と談じあひけり

山格と松山檢事の前に出で甲子の冬の○○をのる

地裁をば立ち出で自動車馳せ乍ら大和博士の館に出で行く

樂々と博士の邸に半日を休みけるかな心おきなく

午後の五時博士夫妻に伴はれ都踊の觀覽に行く

ものをいふ花を集めし九重の花の都の踊見しかな

花か人かはた天女かと疑はる都をどりの艶な姿は

十五年前に見たりし歌舞練場といたく變れり設備萬端
一時間心ゆくまで觀覽し再び博士の邸に歸れり
書畫帳や色紙に筆を染め乍ら暫時の間たはむれにけり
龜山に歸らんとして自動車を京都の驛に急がせにけり
信徒に見送られつゝ八時半花の都の驛をはなるゝ
春雨のしと〳〵と降る丹波口窓吹く風に冷氣覺ゆる
なめて行くくろがね路も二條驛降る春雨のいよゝはげしき
黄昏の暗をあかして遲櫻木の間に映ゆる花園驛かな

花散りて訪ふ人もなき春の夜の雨の嵯峨驛淋しくもあるかな
溪川のせゝらぎの音きゝながら夜は淋しき汽車の旅かな
トンネルを七八ッくゞり夜の道南桑原野にのりいりにけり
並木松越ゆれば龜山高臺の高天閣に電燈照る見ゆ
龜山の驛に下れば明光社宗匠信徒あまた出迎ふ
自動車にゆられて雨の廣小路ひた走りつゝ神苑に入る
京都より吾送りたる粟辻氏に謝禮の意味にて半切贈りぬ
菫月に筆とらせつゝ歌日記よみ〳〵白河夜舟にのりけり

春の夜の花見の夢に浮かされてまなこ醒むれば鷄の鳴く

四月廿七日　於高天閣

暖かき春陽かゞやく高臺に囀る小鳥の聲長閑なり

並山は霞の幕に包まれて小雨ふるかと疑はれける

見渡せば保津の川霧白布を中空に晒せし如く見えけり

稗田野の大石老翁訪ね來て土地の話を宣りて歸れり

穴太より齋藤與四郎氏來訪し玉ノ井會の用件を宣る

暖かき今日の一日を天國の狀と感じて心足らへり

庭の面に九州の人より贈りたる躑躅色々植ゑ込みしかな

信徒の送りし白と紫の萩生の株を庭に植ゑけり

神苑に今日を盛りと匂ひたる櫻の下に花の宴なす

暮れ殘るお多福櫻ながめつゝ今年も花の歌を詠みたり

○

天地の中に吾身の杖となり力となるは神ばかりなる

朝日刺す夕陽輝く花明山にひと本匂ふおそ櫻はも

龜岡の町の櫻の散りし今日おたふく櫻獨り匂へる

嵯峨山の花過ぎ去りし今日の日に春の良めとおそ櫻咲く

旅人もゝ足をとゞめて眺めけり春をかゝへし遅櫻花

眺むればたゞ一本の花ながら春を抱へし遅櫻はも

花の下に佇む乙女の白き頬に散る花びらのしほらしさかな

松を吹く風のあまりか神苑の一本櫻に花の浪たつ

夜櫻の匂ひ益るか吾窓に風かをりつゝ月おぼろなり

老雄(ろうゆう)も倶に交はり酒を汲む花のむしろの賑はしきかな

遅咲きのたゞ一本の櫻木は天恩郷の花にぞありける

色も香もわきてめでたき木(こ)の花の櫻は春の女神なりけり

木々は皆綠の若葉もゆる見て春にわかるゝ櫻の花かな

敷島の道は知られど花し見れば三十一文字の並べたきかな

千早振遠き神代の昔より櫻の花は神にぞありける

賑はしく花咲く樹下(じゅか)に集まりて里の乙女も酒汲む春かな

久方の天津空より降りたる櫻は木の花姫にぞありける

短夜の眠さしのびて咲きほこる櫻に心ひかれけるかな

古のすめらみかども植ゑましゝ櫻は花の王にぞありける

隣人も酒のむしろに加はりて櫻を愛づる春の長閑けさ

一刻のいとまなき身も花にほふ春は一日を惜しまざりけり

うすがすみ野邊に山邊に棚引きて笑ひそめたる山櫻かな

種々の花は匂へど敷島の大和櫻に勝るものなき

するがなる富士の高峯は木の花の神の命の姿なりけり

月おぼろ花朧なる春の夜は吹きくる風も長閑なりけり

烏羽玉の闇もいつしか消えにけり軒に匂へる櫻の盛りに

吹く風もいと芳ばしく薫るなり神苑の櫻花盛りして

昔より櫻の花は木の花の神の姿と尊まれける

夢の國獨りさまよふ心地かな月と櫻のかすむ神苑は

類例のなき神苑のおそ櫻は珍らしきかな春姫の袖

○

産土の小幡の宮のおそ櫻咲きしと花の便り聞くかな

笑顔もて春の女神は櫻花かざしつ風に乘りて來ませり

今朝見れば櫻の下枝二三輪ふくらみながら露に光れり

瀬々良岐の聲も靜かに聞えけり水の面流る、花のこぼりに

天恩郷一本櫻あればこそ名を花明山と云ふべかりける

○

寢る間さへ惜しく思ひぬ一日二日經つ内變る花の姿に

平安の姿なるゝなものを云ふ花と花見る春の夕べは

目には花鼻にはかをり耳に風肌暖かき春の夕暮れ

襟元に吹き入る風も何となく心地よきかな花の下蔭

遠山は霞の幕にとざされて神苑の櫻ひとりさやけし

笑み榮え天降りましたる木の花の比女の命は神ぞのゝ花

大方の春の名殘と一本のおたふく櫻はほゝゑみにけり

情なき小夜嵐かな山に野にほゝゑむ花をもろく散らせり

染め衣身にまとひつゝ花の下に佇みあれば人の目をひく

訪ふ人も絶えてあらしの山櫻春の女神と倶に去りゆく

長閑なる春の山野をふりすてゝ牡丹島にうつる山比賣

ほめられて又惜しまれて櫻木の梢に別るゝ花は寂し

百鳥の聲も忙しく聞ゆなり櫻の花の散りしく夕べは

淑(よ)き人の姿に似たる三吉野の花のながめは飽かずありけり

老翁も春の陽氣に浮かされて花の木蔭(こかげ)に藜(あかざ)の杖曳く

おもしろしあゝ樂もしゝ月の夜の櫻の下に妹と遊べば

忙しき身も半日を花に貸し

黄昏れて人聲高き櫻かな

月おぼろ花も朧や春の宵

ふる里の友の葉書や花便り

風かをる花の梢や月おぼろ

筍とわらびのもてる花の宴

夜櫻に月は風情を添へにけり

花も葉も櫻は春の主人(あろじ)かな

一本の櫻も春のあるじかな

一つ家の軒に一本櫻かな

梅花より心長閑けき櫻かな

法城も櫻にかをる春の宵

宗匠も花見の晴衣つけにけり

黄昏の櫻明るしおぼろ月

一本の櫻に春を送りけり

燻ぶつた瓢簞も出る櫻かな

千鳥ヶ淵千鳥脚踏む櫻かな

脚十文字瓢(ひさご)も輕き夕ざくら

渡月橋千鳥の渡る櫻かな

大悲閣花に黄金の雨が降り

楠人の背に風かをる櫻かな

花ざかり嵐の山や屛風岩

山姫が花描きたる屛風岩

花散るや小鮎が瀧の水くゞり

長のろの淵かをるなり花筏

四月廿八日　於高天閣

大銀杏梢に若芽萠えそめて朝日に映ゆる花明山高臺

國見坂たゝずみあればのろ〳〵と靑大將のはひ出しにけり

雀の子仔猫のスマがくはへ來てたはむれにけり月明館にて

產土の天狗櫻を眺めんと明光社員伴ひてゆく

花明山に歸らんとして咲きほこる夕の花にわかれけるかな

穴太なる小幡の宮の遲櫻春惜しまれてたづね來しはも

花明山の花も好けれど故郷の宮の櫻も捨てがたきかな

咲きほこる天狗櫻にあこがれてお多福美人と倶に來しかな

誰が目にも天狗櫻の裝ひは花も崇高く仰がるゝかな

名にし負ふ小幡の宮のおそ櫻只一本に春を握れり

春も早過ぎんとすれど産土の花をし見れば心長閑けし

招かれて小幡の宮の花見んともの云ふ花を伴ひ來しかな

八重櫻朧くも散れる晩春の艮めと匂ふ宮のさくら木

爛漫と咲きほこりたるおそ櫻ちるを惜しむか蝶の狂へる

吾國の千代のほまれは不二ケ峰の花の化身にまさるものなし

いすくはし花の乙女と花見れば嫉ましげにも蝶の立舞ふ

來て見れば天狗櫻の花の枝に花とまがひて蝶ひるがへる

白雲の立つとし見れば産土のはるけき森の櫻なりけり

○

千早振神代の昔地の上に天降りし櫻は御代の花なる

賑はしき春の山野に花無くば根底の冬の心地なるらむ

久方の天津御空もかすむまで咲きほこりたるおそ櫻かな

三吉野の花は跡なく散りはてゝ春を抱へし宮の櫻樹

一年に一度の花の眞さかりを愛づる吾身の幸多きかな

輪の玉音もさや／＼に響くなり夜櫻を見しねやのふすまに

勇ましく散り行く花も行く春を惜しむか袖にかをる柔風

美しきものいふ花と花を見て保温器使ふセリバシーかな

暗がりの花手折らんと肥後ずいき温湯にしたす春の宵かな

清々し花の姿の目に入りて長命丸に心春めく

月清き神苑に匂ふ櫻花一枝手折るも惜しまるゝかな

濡く雨が一夜さ降つたそのあした何處もかしこも黄金の花咲く

吹く風に花の梢のふり袖をめでし夕べに孕む帆柱

紫の雲かと見れば神苑のそらに匂へる櫻の花かも

夢さめて耳をすませばさや／＼に響けり花の輪の玉の音

留守の家の軒に匂へる櫻花をぬすみて歸る風雅男もあり

產土の神の御前に詣でしも天狗櫻の匂へばなりけり

緣の糸いや强くして此の春も天狗櫻にひかれけるかな

汚れたる心のちりを拂ひけり罪なき花のやさ姿見て

迫り來る世の荒波も白雲の花見る春は長閑なるかな

手を拍てば花や散るらん心せよ小蟠の宮に詣づるまめ人

寝心地も別けて好からむ終日を花にあづけし二つの瞳に
塀越しに匂ふ櫻の花傘を仰げば袖に花片の雨降る
珍らしき花の翼をふりはえて天狗櫻は中空に舞ふ
畵師も筆投げ捨つるらん大空を封じて立てる天狗櫻は
靈國の妻なるかな花にほふ神の御庭の春のながめは
得も言へぬ花の風情にほだされて忙しき身も半日を捨つ
遅櫻小幡の宮の庭の面に春をつかみて獨りほゝ笑む
情なき春の女神のふるまひよ花を散らして夏山に入る
そよと吹く風にも心痛めけり今を盛りの花の散るやと

外國に例しさへなき敷嶋のさくらは花のこきしなりけり
野も山も花もて飾る春の日は人の心もおだやかなりけり
ほの〴〵と花に明け行く春の日は又ほの〴〵と花に暮れ行く
百千花匂へる春も櫻花咲かずば彌生は淋しかるらん
夜櫻の艶な姿に醉はされて酒にはあらぬ長命丸のむ
老人も花をし見れば若やぎて長命丸や保溫器を買ふ
大方の春は櫻に誘はれて笑ひ初めけり野にも山にも
紫の夕べの雲の照り映えて宮の櫻は一入さやけし
暮れ殘る櫻の花を惜しみつゝ歸り路につく珍の花明山

夕風に花は脆くも散りゆきて惜しくも春にわかれけるかな

櫻花さきも殘らず散りもはてぬ今日の眺めのうらゝかなるかも

種々と櫻の花はありながらいと目出度きは山櫻花

花誘ふ夕べの風の吹き入りてねやのふすまの薫る夜半かな

木(こ)の花の今日の盛りも明日の日は散るとし思へば春も淋しき

櫻花匂ふ夕べはそよと吹く風にも心いたみぬるかな

花の散る庭の面にたゝずめば蝶の舞ひ來てふところに入る

花匂ふ天恩郷の夕ぐれは風の音さへ爽かなりけり

花も實もある言の葉を夕暮の櫻をあとに歸る本意なさ

水清。き川の堤に咲きにほふ櫻に懸るおぼろの月。かげ

何人の詩吟。の聲かおぼろ夜の月。下に流るゝ花の春かな

靑庭の一本櫻盛りつゝ風芳ばしき夜半の窓かな

長閑。なる夕べなるかな月。おぼろ花もおぼろに風のかをりて

晩春の花は散れども花薫。月。にほゝゑむ夕べ涼しき

晩春の霞も晴れて大空に澄。む月。かげにかをる夕風

如。月。の空に櫻の花にほふ二名の嶋は暖かなるかな

嵐山花は情(つれ)なく散りうせて新綠もゆる初夏の風ふく

淡然と一重に匂ふ山ざくら見上ぐる姿の風雅(みやび)なるかな

山里に櫻の花の無かりせばいかで訪はまし忙しき身には

草枕二名の旅の初めより月を渉りて櫻見しかな

勇ましく散り行く花の姿こそ日本男子の心なるらむ

神苑の櫻も見たり産土の宮の櫻もながめしこの春

天恩鄕もの言ふ花に比ぶれば吉野の花もうとまるゝかな

天恩鄕もの言ふ花も花見かな

月淸し山亦淨し水淸し

月の照る夜半萬木に露光り

白魚の手にかをるなり花すみれ

溫室の百合は如月に薫るなり

花によし月に亦好し花明ケ岡

滿月や吁滿月や滿月や

○

昨日今日櫻の花に醉はされて面ほてりけり神酒は飮まねど

古里のものいふ花と宮の花いづれも吾を慰むるかな

四月廿九日　於高天閣

唯一人高殿に寝て物思へば家鶏のなく聲おぼろに聞え來

窓あけて南桑の野を見晴せば清く流るゝ保津の川霧

半國の山の尾の上に朝日さして愛宕の峰に紫雲たなびく

朝目よく窓を開けば南桑の野邊を流るゝ風の芳ばし

お多福の櫻は名殘惜しげなく風にそよぎて春は散り行く

南郷の森に一本紅の紅葉の若芽もゆる晩春

堅木の芽八寸木の芽三寸の春の夕べに誰か思へり

なつかしき人の聲よと眞夜中に耳をすませば松吹く春風

月宮臺五色の砂に陽の映えて心長閑けく春風の吹く

北の窓開き寝ぬればそよ風の枕洗ひて黒髪そよぐ

春風のそよぐ窓邊に唯一人手枕すればおくれ毛涼し

アカシヤの芽は青々と萠へ出でゝ風芳ばしく窓に吹き入る

淑き人の姿も見えず唯一人今日も暮れけり明日も暮れなむ

春風に金扇開けばものをいふ花はすげなく散りにけるかな

月照山のぼりて見れば花園に今を盛りとチューリップ咲く

神苑の松のみどりは日に増して吾鼻下の如延び立ちにけり

吾庭の眞砂の上に日は映えて梢の鳥の翼光れり

珍の子も春の陽氣に浮かされて草むらの谷わけんとぞする

一本の老木の松を傘にして靜かに座ます伊都能賣觀音

敷島の道を敎ふる明光の御殿を夕べ訪ひて見しかな

園栗の花は梢にすゞなりて毛虫の如く風にふるへり

山陰道宣傳の爲宇知麿は朝早くより立ち出で、行く

日出麿は深水宣使を伴ひて今日山形に下りけるかな

天長の佳節を祝し大祥殿に吾作品の展覽會なす

霧こむる夕べの野路を走りゆく汽車の音さへねむたかりけり

祥明館至りて見れば英祥が加藤の城を守りてありけり

花明山の高臺わたる春風は朝も夕も芳ばしきかな

さし昇る朝日あびつゝ高臺に佇みあれば心時めく

靈幸ふ神の開きし花明山の珍の寶座は國のいしずゑ

菜の花の藪田の面にほの見えて鳶二つ三つ風に高舞ふ

花散れど風は吹けども晩春の野面を見れば心のどけし

櫟生の林にそよぐ晩春の風がもたらす翠のかをらひ

四月卅日、於錦浦舘

草枕旅に立たんと早朝より起き出でにけり輕き準備に

初夏の風花明山高臺吹きつけて植木の茂みに百舌なき渡る

神風の伊勢の宮居にぬけ詣り實をあかさす近侍つれ行く

南鄕の里より高天閣みれば青雲の上に浮ぶやうなり

月宮殿宮の周りの常磐木は青雲の如高く浮かべり

新道路たどり／＼て停車塲に到れば信徒すでに待ち居り

朝八時十二分の汽車に乗り込みて神風薫る伊勢路に向ふ

鐵外氏滿月淸月吟月と伊勢路の旅にたちし今日かな

ふり返り花明山高臺眺むれば雲の如くに大銀杏映ゆ

河鹿啼く保津の川底眺めつゝ心淸しくくゞるトンネル

訪ふ人も絶えて嵐の山の尾に煙るが如く白雲かすめり
葉櫻の嵯峨の驛路を後にして花なき花園驛につきけり
二條驛間近くなれば赤々と出世稲荷の鳥居が目につく
丹波口驛に來れば島原の角屋の松に魂はかかれり
鐵外氏清月待たせ京都驛ゆ粟辻邸に自動車馳せたり
茶をすゝる暇さへあらず自動車に再び乘りて驛に向へり
午前九時二十五分に京都驛離れて伊勢に向ふ今日かな
粟辻氏吾一行に加はりて水口支部まで案内をなす

鴨川の清流渡る間もあらず汽車は山科トンネルぬけたり
白シャツの汚れたる着て田を作る農夫のかげのかすむ近江路
松山の木の間をのぞく新緑の眺めよきかな春の日の旅
松山の麓にもゆる櫟生の淺黄の縁繪の如く見ゆ
山科の驛にし着けば白衣きて稚兒をかゝへし女立ち居り
松山の麓に一本櫻木の花匂ひつゝ春を惜しめり
たんほゝの花の匂へる田の畔に白き蝶々三つ四つ飛ぶ見ゆ
汽車の窓開けば初夏の風入りて汗に滲める吾顔洗ふ

いと長き逢坂山のトンネルをくゞり行く間のむし暑きかな

トンネルをくゞる間の苦しさに羽織一枚ぬぎ捨てにけり

直ちやんの主人粟辻健三氏大津の驛に別れて下車せり

煙る如かすむが如く水と空一つに見ゆる琵琶の湖かな

青々と麥生の畑をそめ乍ら黄金色なる菜の花の咲く

黄金の敷布並べし如くなり菜種の花の匂ふ近江路

並松の梢黒々燻りて枯れたるもあり眺め淋しも

湖青く麥生は緑なたね畑黄金に映ゆる瀬田の橋の邊

菜たね畑かこむ野中にこんもりと建つ産土の杜のさやけさ

松林緣に映ゆるかたはらにポートワインの看板みにくし

近江路や一眸十里菜種畑

膳所粟津矢走一眸菜種畑

雪隱のかをり高々窓を吹く科戸の風も草津の驛かな

菜種畑匂ふ野中の一つ家に瓦屋の煙もう／＼と立つ

栲衾白藤の花おもしろく咲き亂れたる手原の驛かな

三上山間近くなりて並山のかすみ漸く晴れそめにけり

竹藪の垣根を縫うて一本のおそ櫻咲く手原の野邊かな

そら豆や豌豆の花の匂ひつゝ近江平野に初夏の風吹く

八洲川の水淺みつゝ魚あさる男のかげの三つ四つ立つ見ゆ

石灰岩持ちて固めし松山の木の間いろどるおそ櫻かな

川の砂利山の如くに積みてあり石部の驛は川近くして

一株の山吹の花咲き亂れ風になびける三雲の驛かな

川柳土堤につゞきて長々と緑清しき天の八洲川

散り果てし櫻樹淋しく立ち並ぶ貴生川驛は風靜かなり

貴生川の驛より電車のりかへてかすみの野路をゴト〳〵と行く

おそ櫻川の堤に一二本今を盛りと匂ふ野路かな

六分間電車にゆられ水口の驛にしつけば自動車もなし

乘合のガタ自動車に運ばれて支部に到れば戸閉なりけり

やむを得ず化物屋敷の支部長が舘をさしてのり入りにけり

赤松の老樹枝ぶりおもしろく化物屋敷につゝたちてあり

杉林手ひどく梢はらはれて化物屋敷につゝ立ちてあり

たゞ廣き庭の面に櫻木の散り殘りたる一本たてり

寺の屋根木の間に見えて何となく淋しさせまる庭の面かな

埃たつ春の野道を五里ばかり車走らせ柘植驛に入る

馬券賣りし昔の跡を化物の屋敷と町人あやまり傳ふる

神前の拜禮了り三十枚記念と色紙したゝめにけり

庭前に立ちて一行まめ人と今日の記念の小照を撮る

燒山の跡に蕨の瘠せたるが手を攢げつゝ靜かにふるへり

草山の躑躅の蕾ふくらみて客待顔なる初夏の空かな

草山のあなたこなたに點々と茂れる小松風雅なるかな

滋賀縣木口支部稲井邸に於ける記念と信徒

岩山のあなたこなたを縫ひ乍ら茂る小松のかげのさやけさ
茂山の溪をあかして櫻花今を盛りと咲き滿ちてあり
神風の伊勢路に入りて菜種畑いとも少くなりにけるかな
川底に奇石怪岩立ち並ぶ溪の流れのさわやかなるかな
山と山ぬけ出で廣き田圃路の中に淋しき關の驛かな
山遠み野は擴がりて風もなく空ふさがれる龜山の驛
鈴鹿川流れ淺せつゝ右左土堤の田圃に桑の芽をふく
右左松の林に圍まれて進めば初夏の風くゞるなり

一本の老木の櫻咲き殘り風暖かき下の庄驛

菜の畠野邊を黄金にそむる見えて一身田に吾汽車つきたり

津の驛や阿漕を越えて高茶屋の驛に敎祖の偲ばるゝかな

山田市に泊らんとして一と二見鳥羽されにけり錦浦館迄

花は早梢を去りて葉櫻の新緑もゆる六軒の驛

空車曳きつゝ野道ぶら／＼と眠た氣に行く人力車夫かな

本居翁遺跡に近き松坂の驛の邊りに菜種花咲く

水清き櫛田の川の面ふさぎつゝ杉の筏の數多浮かべる

相可口驛を過れば右左松の小丘に夕陽ほの映ゆ

常磐木の林並びて風清く霧につゝまる宮川驛かな

神風の伊勢の宮川いや廣く土堤の緑の水に映えつゝ

山田驛來りて見れば外宮の杜こんもりと神さびたてり

落合川水清みつゝ夕さりて岸邊の山に新緑かをれり

朝熊山高くかすみてケーブルカー電燈ほのかにまたゝきにけり

二見浦驛に來れば乗降の客足しげくなりにけるかな

楡生の森かげくらく茂りつゝ陽は漸くに黄昏れにけり

水口の支部より福井宣傳使加はり一行七人となる
鳥羽の驛一行七人下車すれば錦浦館より旗ふり出迎ふ
たそがれの幕のおりたる階段をたどりて錦浦館に入りけり
湯に入りて汗を流せば身も輕く心清しくなりにけるかな
草枕旅に疲れて眠氣さし夕飯すませて横たはりけり

○聖師様伊勢、滋賀、三重、京都方面御旅行の記

京都　栗辻忠造

四月三十日

聖師様には午前八時十二分龜岡驛發同五十五分京都驛御着、一行は井口鐵外、谷前喜代子生一清子、鈴木光義の諸氏。

聖師様には生一氏、鈴木氏を從へ栗辻分所長宅に御立寄りになり直に御隨行を許され午前九時二十五分柘植驛行列車に御乘車水口支部に向はる、一行六名。車中にて御歌日記五十七首、瑞句二句御口述になり、生一氏之を筆記さる。車中御機嫌麗はしく十時五十八分貴生川驛御着、直に電車にて水口驛御着（十一時十五分）。京都より發せし電報に誤りありて支部に其電報着かざりし爲め、驛には信者の御出迎へなく、從つて御出迎への自動車もなく、止むを得ず乘合自動車に御召しを願ひ、瑞祥會支部と愛善會支部との誤りより愛善會支部の方へ御出で下されし處又不在にて戸閉となり居り、それより瑞祥會支部に向はれ十一時三十分瑞祥會水口支部御着、支部にては電報不着のため聖師様の突然の御來臨に支部長夫妻は大狼狽にて聖師様を御迎へし、信者一同に非常召集で通知を發し、約一時間半の後信者支部に馳け

集り聖師樣に御挨拶を申し上げた。無論何の準備も出來て居ないので一時は大混雜の態であつた。

聖師樣には御機嫌うるはしく何の御咎めもなく支部及支部長福井重內、次長小島一米、係員中村又一、愛善會支部長鵜飼恒三郎の諸氏に對し、觀音樣及達磨樣の御軸を御下げ渡しになつた。

支部員中村すゑ子は長らく病中であつたのが、聖師樣特別の御鎭魂を頂き、病人を初め一同は唯有難たさに感淚に咽んだ。

午後一時御晝食それ〴〵信者一同に御面會下され色紙を卅三枚御揮毫、一同に御下げ渡し下され、支部庭前にて一同記念の撮影あり、二時四十五分自動車にて水口支部御出發柘植驛に向はる。福井支部長參宮の御伴に加はり一行七人となつた。柘植驛まで龍池支部長福井義磨氏、中村又一氏御見送りせらる。

水口支部面會者

福井重內　仝シゲ子　小島一米　仝タミ子　仝フデ子　中村又一　仝スヱ子　今村利一　鵜飼恒三郎　仝サト子　廣瀨助三郎　仝マス子　仝壽榮吉　同仝佐吉　松田あい子　藤田ひで子　谷口氏夫人　望月淸平　仝淸平母　仝チヨ子　北田貞吉　仝茂兵衞　小島景次郎　龍池支部長福井義磨

其の外拾三名。

午後三時四十分柘植驛發鳥羽行急行に御乘車、車中續々御歌日記の御口述あり、六時二十六分鳥羽御着、同驛には途中にて電報で聖師樣の御泊りを通知してあつた爲か錦浦館の旗を立てゝ店員三名御出迎へ申し居れり。聖師樣には直に驛前なる錦浦館に御投宿遊ばされ、御入浴後御夕食を御召上りになつて御歌日記の御口述あり、其後暫く御疲勞の爲であつたか靈界の御用であつたのか御苦しみの御模樣であつたが、福井氏靈界物語の拜讀中に御就寢遊ばさる。津支部長片岡幸次郎氏御機嫌お伺ひの爲參上同宿ありたり。

五月一日　　於安濃津市古梅軒

朝空は雲低うして相島の峰の上鷗二つ三つ舞ふ

坂手嶋近くかすみて海の面にいとも淋しく朝雨の降る

志摩の國鳥羽の海邊に宿りして九鬼の歴史を思ひ浮かべつ

錦浦館僕婢に送られ朝の九時鳥羽の驛より二見に向ふ

二見驛降りて見ればそほ〳〵と驛のおもてに小雨降りしく

自動車を二臺雇ひて二見岩興玉神社に詣でゝぞ行く

名物の螺蠑の壺燒食うて見れば味は無けれどにがみたつぷり

さゞえ貝褌までもひき出して一つ殘らずたひらげにけり

雨の道自動車馳せて神路山宇治大橋の袂に下りたり

宮川のみそぎのふちに佇みて鮎の泳げるさまを見しかな

杉木立苔むす清き神宛を縫ひつゝ神前に詣でけるかな

大前に詣づる人の引きもきらず賑やかなりけり神苑のあちこち

戰利品大砲の前に立ち並び記念の小照滿月が撮る

外宮に自動車馳せて一行は額突きにけり神のみ前に

神苑を立ち出で旅舘高千穂に入りて晝飯なしにけるかな

午後の二時四十分白榕樹青々茂る山田驛たつ

ほか／＼と日は暖かく風も無くかすめる神路山に別るゝ

山遠み野は廣みつゝ初夏の風かすかに窓にうけつゝ進む

常磐木の松の林に包まれし宮川驛に吹く風清しき

松林麥生の畑や桑畠大根花咲く田丸につきけり

麥の穂はさやを揃つて眞直に田の面に初夏の風あみて立つ

白藤の今を盛りと匂ひつゝ日もうらゝなる相可口かな

青々と名は知らねども一本の花の木笑ふ徳和の驛庭

黄金の菜種の莚敷きつめし松阪驛に風のかんばし

櫻木の彼方此方田の畔に並び立つ六軒驛に凉風わたる

高茶屋の驛より自動車馳せ乍ら香良洲神社に詣でゝぞ行く

大前に拜禮をはり自動車に再びのりて安濃津に向ふ

午後の五時西町古梅軒に入り今日の疲れを休めけるかな

吾居間に因縁の人の筆の跡清心寡欲の額の懸れり

○聖師様伊勢、滋賀、三重、京都方面御旅行の記

京都　粟辻忠造

五月一日

午前五時十五分御目覺め　四方の風景を御賞讃、旅舘の庭園の大きなソテツを御眺めになつて見事な物だと御賞めになり、　鳥羽港の山水を御眺めになり、相島、坂手島、百取島等の名を御聽取りになり、又二時間餘りうつら〳〵と御寢みになつた。

津支部長片岡宣傳使は本日の御香良洲神宮へ御參拜の自動車及び宿舍の準備の爲め七時二十分先發さる。

八時三十分御入浴後朝食を召され九時二十三分鳥羽驛御發車、九時三十五分二見驛御着、一行七人二台の自動車に分乘して二見ケ浦へ御出になり、海岸にて二見の岩に御默禱あり、

時に小雨ありて傘を御召になる　午前十時二見ケ浦御出發途中朝熊山へ御登山の豫定なりしも雨天の爲御中止遊ばされ、自動車にて二見名物螺蠑の壺燒を召上られ、　御機嫌麗しく十時三十五分宇治橋御着、五十鈴川の鮎等御覧あらせられて内宮に御參拜　其頃より雨やみて一行と境内にて記念の寫眞をお撮りになり、十一時十分外宮に向はせらる。

但し今回の御參拜は御微行なりし爲、　正式の御參拜はなさらず御默禱にて御拜せらる。

十一時五十分外宮御着、又々小雨の中を外宮に御參拜、　御默禱の後正十二時山田驛前高千穗館に御少憩後御晝食を召上らる。　午後二時四十分山田驛發、名古屋行列車に御乘車、車中御歌日記の御口述ありて三時三十五分高茶屋驛に御着御下車遊ばさる。　同驛には片岡津支部長自動車を準備して御迎へあり、　一行八人二臺の自動車にて御香良洲神宮に參拜、社前に御默禱の後境内にて一行と記念の寫眞を御撮り遊ばさる。　此頃大空は心地よく晴れ渡る。

四時十分御香良洲神宮御出發、　四時五十分津市西町古梅軒に御着御入浴後御歌日記の御口

述遊ばさる。面會者黒川宣傳使、橋口宣傳使及同氏夫人の三名。七時御夕食後御就寢遊ばさる

五月二日　於中村邸

古梅軒宿を朝九時立ち出で、乙部の津支部さして馳せ行く

神前に祝詞を終り半切紙色紙短册數十枚書く

十一時汽車に乘らんと支部をたち偕樂公園一巡を爲す

三重縣津支部に於て聖師御染筆

十一時十七分發汽車に乘り津を後にして貴生川に向ふ

紫雲英花菜種花咲く天國の野路を走れば風の涼しも

片岡、太田伊勢子、橋口莊一氏同車、吾行を見送る。

右左松の林のうるはしく丘に茂れる下庄驛

關川の水淺みたる見つゝ行けば汽車は龜山驛に這ひ入る

日本武尊の御墓は約一里東北能褒野に居ます龜山

狩野法眼其風光に筆捨てし關の筆捨山は綠す

遲櫻あたりの山に咲きのこり綠に映ゆる加太の驛かな

津支部に於ける伊勢神宮御參拜の聖師一行と信徒

水口支部 小島一米 廣瀬壽榮吉 福井鈴香 北田はる 北田ふさ、龍池支部 福井義麿 森島久藏 森島榮 望月淸兵衛吾行見送る。

繩束を山と積みてし大原市場驛の葉櫻風にそよげり
神風の伊勢の安濃津のいそばたに花の乙女とひろふ美少貝
二つなき三國一の四方面五洲にかゞやく六つの花かな
山の神知らぬ辨天胸に住み
打ち寄する安濃津の濱の仇浪は初夏新綠の薫りもたらす
千年の苔むす老松蜒々と海を劃して長く續けり

夏の日は日に四五千の人の子が海水浴する遠淺海かな
一本の櫻の匂ふ深川の驛にしつけば汗面に出づ
水口の驛にし着けば吾送るまめ人旗ふりプラットに立つ
其昔蒲生氏郷築城の跡の殘れる日野につきけり
一本の櫻木藤の棚白く咲きほこりたる朝日野の驛
長谷山櫻谷なぞ東にそびえて見ゆる日野の大塚
櫻川驛に人波流れつゝ窓吹く風の暖かなるかな
吾見山の雄姿間近く見えそめて長谷の驛に進み入りけり

八日市驛のあたりは岩をもて構成されし松山のみなる

觀音正寺山かすみつゝ五箇莊驛にし入れば葉櫻しげる

愛知川を渡りて見れば廣けれど水一滴もなきぞ淋しき

咲きのこる櫻方々にふるひつゝ大空くもる愛知川驛かな

垣の根の柳の大樹若芽ふきて風になびける豐郷の驛

山遠く平野は廣く野の中に小さくたてる尼子の驛かな

高宮川水は無けれど幅ひろく多賀の社に向ひ流るゝ

多賀神社參詣口なる高宮の驛にしつけば人波のよす

彦根驛に漸くつけば大和博士以下宣信徒出迎へてあり

自動車を數臺雇ひて彦根城趾樂々園に入りてやすらふ

伊井大老居室の跡にやすらひて昔の歷史偲びてしかな

窓がらす透して見ゆる琵琶の湖のかすむ景色のうるはしきかな

學生が矢聲揃へてボート漕ぐ聲勇ましく水の面にひゞけり

樂々園八景園の庭先をまめ人ともに逍遙せしかな

水濁る池の面にまな鯉や緋鯉や龜の浮きて遊べり

うるはしく近江八景寫したるこの庭の面のたぐひなきかな

瀬田の橋に佇みあれば滿月か吾知らぬ間に小照を撮る

園内を一巡なして岩山に宣信ともに小照を撮る

加減よき料理の膳に舌つゞみ打ちてしこたま腹をふくらす

半切や色紙を書きてまめ人に今日の記念とわかちけるかな

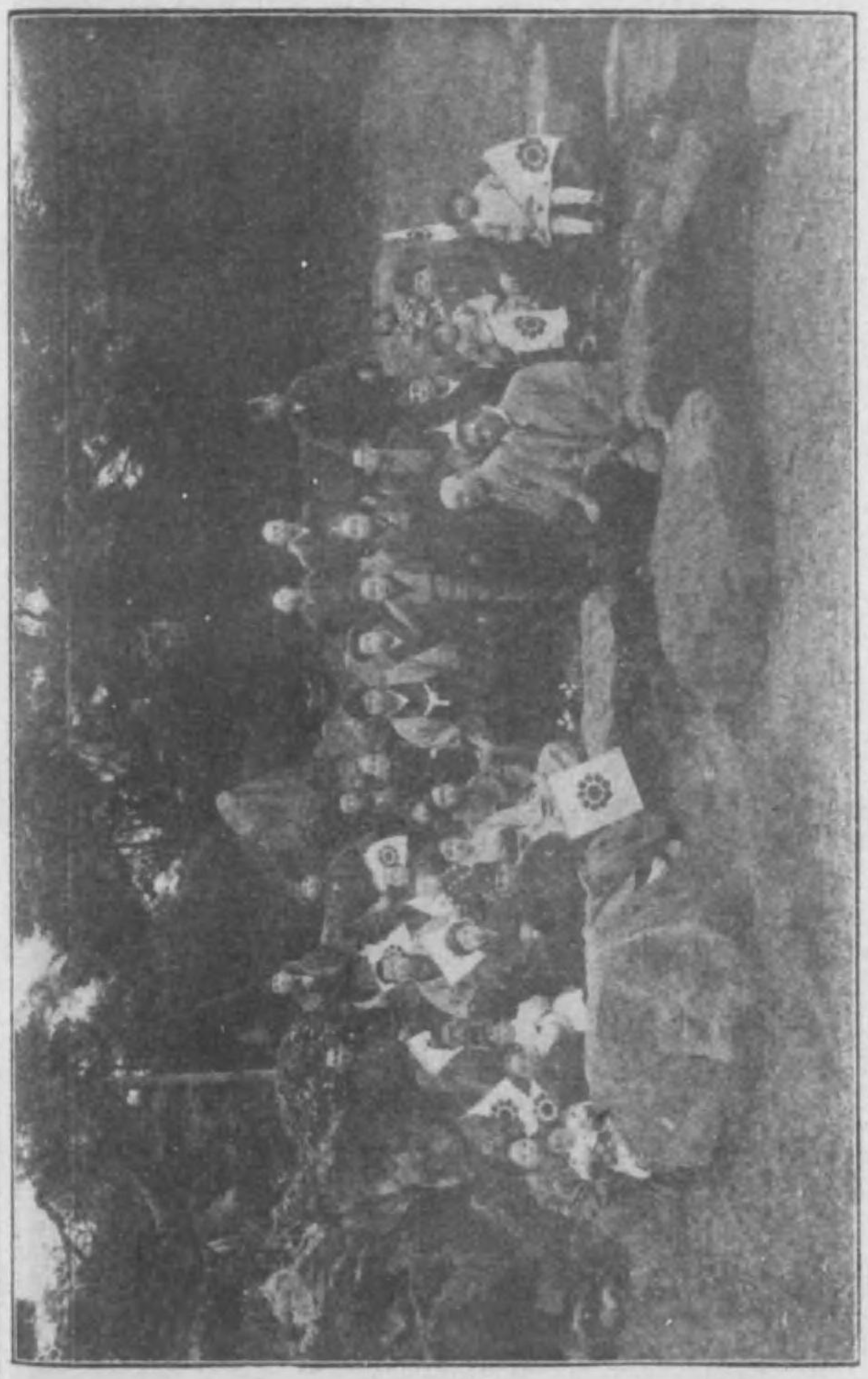
黄昏る、頃より自動車相連ね高祖氏館にたち向ひけり

彦根支部高祖氏館の神前にまめ人共に太祝詞のる

拜禮を了りて靈界物語滿月近侍によませけるかな

大和夫人生家瓦燒町の中村邸に小夜更けて行く

滋賀縣彦根支部に於ける聖師



滋賀縣彦根町樂々園内の坐禪僧一行と信徒

こゝも亦半切色紙なとかきて心身ともに草臥れにけり

滿月や吟月二人は小夜ふけて高祖氏舘に歸りてやすらふ

滿月や其他と共に中村氏舘に吾は安くいねたり

庭の面に雨そほてども何となく風あたゝかき初夏の夜半かな

初夏の風吹く度毎に黄金の菜種の花の匂ふ宿かな

○聖師樣伊勢、滋賀、三重、京都方面御旅行の記

京都　粟辻忠造

五月二日

午前五時五分御起床 今日は朝より天氣快晴。福井水口支部長は本日彥根支部へ聖師樣御立寄りになる準備の爲、午前六時四十四分津發にて先發。

聖師樣には朝風呂を召され、御朝食の後 八時片岡津支部長御迎への二臺の自動車にて御案內を承はり、旅館古梅軒御出立、贄崎海岸に御散策遊ばされ、海岸にてびしよ貝拾ひを暫時なされて再び 自動車に召され九時五分津市乙部町津支部へ御着、半折色紙へ御揮毫遊ばされ支部御神前にて一同と共に神言奏上遊ばさる。それより記念撮影あり。十時三十分津支部御出發、偕樂公園を御覽の上十時五十五分津驛御着。

本日津支部にての面會者、

片岡支部長　黑川次長　橋口係員　片岡七郞　小森智代之助　田名瀨八十松　太田いせ子

田名瀨なみ子　弓矢いつ子　水谷くめ子　片岡夫人。

午前十一時十七分津驛御發車前プラットホームにて御寫眞を御撮りになり、一行六名の外に津支部長及太田いせ子、橋口宣傳使の三名は柘植及貴生川驛まで御見送りさる。津驛にては黑川宣傳使外數名御見送り下さる。

聖師樣には 車中相變らず御歌日記の御口述に御餘念なく、津支部より御獻上の特別の御辨當を御召上りになり、一同御下がりを頂戴す。途中加太、柘植間にて風景を御賞美になり四ケ所程寫眞を御撮りになる。鈴木滿月氏寫眞の御用を承はる。

柘植驛にてお迎への人々

水口支部＝小島一米　廣瀨壽榮吉　福井鈴香　北田はて子　北田ふさ子　望月淸平　龍池支部＝　福井支部長　森島久造　森島榮。

午後一時二十二分貴生川驛にて近江線に御乗換になり午後一時二十八分彦根驛に向はせらる。北田はる子、北田ふさ子の兩氏は貴生川驛にて下車さる。貴生川にては

水口支部長　廣瀬ます子　小島のぶ子　小島あき子　小島よね子　小島たみ子　小島ふで子　中村又一　鵜飼恒三郎　鵜飼さと子　今村利一　中村かよ子　松田政則　福井しげ子

八日市支部長若崎環　一誠支部長藤堂義方　今西彌惣七の諸氏等御出迎へ、彦根驛まで御見送りせらる。八日市驛にて御見送り申上げし者八日市支部長夫人外五名。

午後二時三十六分彦根驛御着、同驛には先發せし福井水口支部長始め京都分院幹事大和博士夫妻、高組彦根支部長始め全保、青山榮子、全玉子、佐藤松子等自動車を用意して御出迎へせらる。二時五十分四臺の自動車にて樂々園に御着御少憩、次で同園を御遊覽の後記念の撮影を終り、半折色紙等の御揮毫を下され、御夕食後六時四十分此處より彦根支部に御着、樂々園にて御出迎へ申上げし者、彦根支部員北澤祝大、神幸支部長福井又次郎、小西四郎兵衛の三氏。

彦根支部にて御少憩の後御神前に神言御奏上、小生先達にて御神歌奏上、終つて鈴木滿月氏の靈界物語第四十八卷の拜讀あり。八時二十分彦根支部より（大和博士實家）中村正造氏宅へ御着、庭園を御散歩後御入浴遊ばされ、半折色紙等に御揮毫の後御就寢なされたるは午前零時なりき。

谷前、生一兩近侍及水口支部長等は彦根支部にて宿泊す。

五月三日　於高天閣

朝七時四十分の彦根發に乘らんと中村館を立ち出づ

まめ人に見送られつゝ彦根驛西行汽車に身を托しけり

水もなき大川渡れば近江路の野山けむれる河瀬に入りけり

遲櫻まだ散り殘る稻枝驛に小雨ふりつゝ菜の花かをる

能登川の驛に進めば傘さして年增美人が一人のりこむ

八幡の驛より岩崎環藤堂氏高祖保氏別れて歸る

篠原の驛に數名の兵卒が小銃かつぎ立ちて待ち居り

三上山妙光寺山けむりつゝ心も野洲の驛に着きたり

野洲の川風冷やかに渡りゆけば紅葉のもゆる守山の驛

牡丹櫻今滿開の近江路の草津の驛に雨煙るなり

山も野もかすみの幕に包まれて湖の面近き石山の驛

乘降の客も大津の驛越えて都へ上る山科トンネル

山科や逢坂の關乘り越えてはやくれたけの伏見に入りけり

鴨川の流を渡る間もあらず汽車は京都の驛につきけり

宣信徒プラットホームに充滿し伊勢の下向を待ち迎へ居り
中村はる子大丸髷に若やぎてプラットに立つ姿目につく
粟辻氏三雲氏夫人龜山へ吾送るべく同車せしかな
丹波口出口の柵に名を得たる島原右手に二條に入りけり
京都より吾送りたる十數名宣信二條の驛に別れし
花園の驛に來れば墨染の衣をつけし僧の立ち居り
雨そほつ野路を走りて花散りし花より團子の嵯峨につきけり
龜山のトンネル出づれば嵐峽館影を寫せり谷の流に

あやふくも魔のトンネルをぬけ出でゝ山本口にホット息つぐ
龜岡の驛に漸く下車すれば宣信雨ををかして待てり
神苑に歸りて見れば櫟生の林見まがふばかりかはれり
英春氏初枝子結婚式典を光照殿に擧げにけるかな
結婚の式も終りて安生館の直會宴にまねかれてゆく
何となく苦しきまゝに氣も重く高天閣に雷鳴はげしき
雷鳴のはげしき音に驚きて明光天女集まり來る

○聖師様伊勢、滋賀、三重、京都方面御旅行の記

京都　粟辻忠造

五月三日

午前六時御目醒め、御朝食後直に彦根驛に御着、七時四十七分發の列車にて天恩郷に向はせらる。彦根支部よりは北澤祝大宣傳使御禮御見送りの爲め同車せり。尙一行の外大和博士夫妻は二條驛まで、高無彥根、岩崎八日市、藤堂一誠各支部長は同車にて八幡驛まで御見送り申上ぐ。彦根驛にては

高無ふじ子　青山玉子　青山榮　佐藤松子　中村正造　中村正子　中村母堂

等御見送りせらる。能登川驛にては福井神幸支部長迎送せらる。聖師樣には車中御歌日記を御書き遊ばされ、近侍滿月氏に御命じになつて車中より蒲生郡岡山附近を撮影せしめらる。

草津驛にては京都分院より理事長中村良春(新助)、紫川安史、三雲孝春、大谷敬祐、中江儀造の各宣傳使京都驛及二條驛まで御同車迎送さる。

聖師樣には車中常に御機嫌麗しく各宣使と御快談遊ばさる。大津驛にては西村大津支部長を始め中島平吾、服部菊次郎、高見和輝、西村いと子、小倉いし、堀江靜子等迎送申上ぐ。

京都驛は左の迎送者あり。

中村治子、伊賀いせ子、四方萬壽、渡邊梅子、鎌光よね子、原田粂次郎、村川、加藤、平井木全、前西、田中末吉、田村、吉田、今井各宣傳使、粟辻まき、同直子、平井まつ枝田村エン外拾數名。

京都驛午前九時五十分發園部行列車にて同十時三十六分龜岡驛御着、天恩郷在住の役員信者百餘名の御出迎へあり、聖師樣には御無事に高天閣に御歸館遊ばされた。

五月四日　於高天閣

萬壽苑眞木の繁みにいせこ鳥聲も長閑にうたふ朝哉

どんぐりの花は漸く黒ずみて若葉青葉の梢に萠えたり

八雲たつ出雲の宮に詣でんと明光天女朝から仕度す

自動車を二臺連ねて正午前出雲の宮をさして馳せゆく

紅つゝじ山吹の花咲き匂ふ小徑走れば小雨降り來る

忘れたる辨當とらんと雄月が滿月伴ひ神苑に歸る

神苑の牡丹の花を見て在れば辨當たづさへ雄月來れり

短册を忘れし事に心付き再び滿月神苑に歸る

一の宮かぐら殿にて歌の會開きて秀調選みけるかな

初夏の陽は早西空にかたむけば龜岡さして歸路につきたり

神苑に歸りて見ればば天聲社人かげもなく心淋しき

時ならぬ寒さにおそはれ腹いため炬燵や懷爐にぬくめける哉

黄金の花をかざして降る雨にしほれ顏なる垣の山吹

富貴草盛り見んとて訪ねゆく路の上に匂ふ山吹の花

小雀の飛びゆくあとにたわ〳〵と梢ゆるげり山吹の花
床の邊に一ひら三ひら山吹の散りたる風情一入床しき
里の子が頸根にかざす山吹の姿流るゝ石橋の下
水底の藻草も黃金に染め乍ら山吹にほふ井出の玉川
春雨の名殘を浴びてうなかふし露に匂へる山吹の花
初夏の風あみつゝ行けばたわ〳〵と賤が垣根に匂ふ山吹
晴れて好し雨に又好し山吹の花の盛りは風たつも好し
黃金の菜種の野邊と色と香をきそひて咲くか山吹の花

咲き匂ふ牡丹の花を描かんと思へど艶なる姿に筆捨つ
柊野に牡丹の花の咲き初めて夏は來にけり瀨見の小川に
夏姬の晴衣の袖を見たりけり千歲の宮の牡丹の園に
足引の山を見捨てゝ春姬は移りましゝか牡丹畠に
二三日季節過ぎしと悔い乍ら眺むる牡丹は見飽かざりけり
八雲たつ出雲の宮の神苑に匂ふ牡丹の神さびたるかな
富貴草庭もせきまで咲きほこる出雲の宮の風雅なるかな
白赤緋紫其の他いろ〳〵と艶をきそへる牡丹畠かな

一の宮牡丹の盛りに訪なへば見る場なきまで人の集へる

雨雲はあとなく晴れて日光さす牡丹の花の艶のよきかな

春かけて咲き匂ひたる白藤を惜しくも散らすか初夏の雨

忙しき身も白藤に憧憬れて訪ね來し哉千歳の宮居に

白藤の咲き匂ひたる神苑に心すがしく初夏の風吸ふ

今年は白藤の花五六日咲きおくれしと宮司宣る

小夜嵐吹く音聞けば庭の面の藤に心を曳かれ眠らず

白藤の花高々と八雲たつ出雲の宮の幣帛と咲く

一の宮ふりさけ見れば鳥居の根噴水の如白藤の咲く

老松の梢に高くからみつ、闇を明かして咲ける白藤

降る雨に咲き下りたる山藤のゆるしの色に瑞の露照る

紫の衣をまとひて一の宮に詣づる空に白藤匂へり

初夏の雨ふりしく度に野も山もみどりの色の艶深みゆく

しと／＼と雨ふる宮の神森ももゆる緑に新たまりけり

紫の衣の袖に初夏の風かんばしく薫る旅かな

紅躑躅朱の玉垣染め乍ら出雲の宮の庭の面に照る

藤躑躅牡丹山吹色々と艶を競へる出雲の春かな

五月五日　於三嶋別院

明光社榮え三嶋の別院に躑躅見んとて朝より準備す

風清く御空晴れたる神苑をあとに一行十七の旅

龜岡の驛を離れて高臺を顧すれば庭樹光れり

溪川の清き流れを蜒々と下る筏の面白きかな

危ふさに名を知られたる第三の鵜飼トンネル無事に越え行く

嵐山花園二條丹波口京都に着きて幹線に乘る

向日町山崎越えて初夏の風浴みつゝ高槻驛に下車せり

自動車を數臺並べて別院の花のやかたに息を休らふ

咲き初めし躑躅三嶋の別院に花の乙女の言の葉かをれる

天恩郷月の乙女も天降りして躑躅三嶋の花に醉ふかな

咲き初めし躑躅三嶋の別院に物いふ雀の鯨波の聲かな

咲きそめし三嶋の宿の赤白の躑躅にかをる初夏の風

新綠の庭の面五色に綾なしてかをり床しき躑躅の花かな

庭の面を飾る躑躅のなかりせばさみしかるらむ初夏の住居は

まだ咲かぬ蕾の花もありながら躑躅三嶋の庭の面さやけし

結髪の風士も倶に交はりて躑躅三嶋の庭にさすらふ

黒錆し生駒庭石縫ひながら匂ふ躑躅のしほらしさかな

咲きほこる躑躅を歌に詠まんとて美人の宗匠庭に爪嚙む

苔の生す雪見燈籠あかあかと照らして匂ふ紅躑躅かな

紫の衣に思をつゝじ咲く庭にし立てば面ほてりつゝ

珊瑚樹のかざしに映ゆる丹躑躅の花の乙女の面の清しさ

平戸躑躅今日を盛りと咲き匂ふ三嶋の宿に日本歌詠む

栲綱の白き躑躅のくちびるを心行くまで吸へる蝶かな

風早の天恩郷より降り來て榮え三嶋の躑躅に醉ふかな

夏姫の土產なるらむ風清き庭のおもてに薰る丹躑躅

咲くも好し咲かざるも好し生駒石根締と生ふる庭の躑躅は

今年もひきつけられて躑躅咲く三嶋の宿に友と來しかな

初夏の風靜かにそよぐ庭の面に匂ふ躑躅のあでやかなるかな
庭の面に躑躅の花のなかりせば石の配置も淋しかるらむ
艶人が花の都をあとにして花の盛りの躑躅見るかな
丹躑躅の花を三嶋の別院に袖吹き拂ふ初夏の風かな
玉敷のみやこに居ます兄の君に躑躅の花の香贈り度きかな
花見んとみやこを西に向日町思ひを袖に躑躅咲く庭
花躑躅三嶋の庭に芳ばしく風かをるなり初夏の津の國
物をいふ花とつゝじの酒の座の銘酒女性に赤らむ面かな

○

如月の空より待ちし丹躑躅の花の香高く麗はしく咲く
思はずも吟醉湧きぬ月の夜の庭の躑躅の露に浸りて
天恩郷月の宮居の丹躑躅に澄む月かげの忘ら得ぬかな
紫の躑躅の花を雲と見て長閑に浮かべる月宮拜がむ
富士ケ峯に望の夜の月仰ぎ見れば三國一の偲ばるゝかな
打ち見やる嶋の崎々月影の高く冴えたる秋の夜半かな
雄々しくも月に三斗の飯を喰ふ若き男の子の背の伸びて行く
世の恒の人にすぐれて肉月のよき少年を公時と云ふ

ものを言ふ花を三嶋の別莊に月は宿れり躑躅匂へり

文の家の棟にかゞやく月光を笑窪の海に浮かぶる人かな

春は花夏は牡丹に丹躑躅に暮れ行く家の靜かなるかな

艶やかな牡丹の花の淸き香を慕ひて舞ふか蝶の三つ四つ

春姫のおぼろの袖をかき分けて淸らけく照る夏の夜の月

三吉野の春の半の花曇り吹き晴らさんとあさ風の吹く

曇るかと思へば晴るゝ仲秋の空に明月冴えわたるなり

神風の伊勢の宮居の神森の闇にかゞやく仲秋の月

西山に日はかたむきて東のみ空に昇る望の夜の月

白魚の柔手に持てる花菫薫るも床し初夏の夜の月

大井川淸き流れに月澄みて影をおとせり保津の並山

月も日もこの神庭に天降らすか白と赤との躑躅匂へり

若き日のもゆる思ひを其儘に庭の躑躅の血汐に見るかな

新緑の萠え立つ庭に紅躑躅かをるも床し雨晴れの今日

五月五日三嶋の神苑に來て見れば躑躅の花は五色に匂へり

○

一　午後五時京都より大和通仲醫學博士の案内にて京都市の田中辨之助、三嶋照

二の兩氏來訪されたれば、例の如く姓名讀込の歌を色紙に書きて與へたり。

○姓名讀込歌

大和魂奮ひ起して進み行けば誠は天に通じて伸びなむ

知り合ふ田中の選擧は幸あらむ辨財天女之助けある身は

津の國の榮え三嶋の別院を照らして來たる二人連かな

○

黄昏と共に別院立ち出で、高槻驛より歸途につきけり

明光社宗匠其他十七人無事に車上の人となりけり

天王山松の木の間に新緑のもゆる姿のうるはしきかな

山崎の驛を東に向日町桂の月も矢の如くすぐ

京都驛降りて明月薑月と三雲氏館に入りて汽車待つ

三雲氏の館にしばしやすらひてまた自動車馳す丹波口驛

七條の驛に待ちたる一行と丹波口より一つとなりけり

二條驛花園驛も夢の間に千葉の葛野の嵯峨驛につく

龜山をはじめトンネル七つ八つぬけ出でいよ〳〵龜岡につく

くたぶれて前後も知らず高殿にやす〳〵つゝじの夢を見しかな

五月六日　於高天閣

朝晴の空風冷えて神苑に鳴く小雀の聲の淋しさ

氣まぐれに月光寮に展覽會專用色紙をしたゝめける哉

智照館設計圖持ち穴太より齋藤大工上り來れり

和歌の選なさんとすれど何處となく苦しきまゝに中止せし哉

綾部より富士津日水勇氏訪ね來て日月日記の題字もちゆく

光照殿齋藤英祥結婚の儀式に列し太祝詞宣る

直會の式にまねかれ午後の四時祥明館に列席を爲す

月宮殿夜のさ庭を近侍子とともに巡りて清き風吸ふ

筑紫よりいと珍らしき土產もち小竹玖仁彥歸り來れり

小夜更けて明光殿にゆきしまゝくたぶれ一夜をいねにけるかな

五月七日　於教主殿

銀杏の梢に凊くかさゝぎの集ひて鳴ける神苑の朝かな
月の宮檜の杜に山雀の聲さえ渡る朝淸しき
そほ〳〵と雨降り來り高臺の檜の杜に雀むらがる
落合氏一行五人十時過ぎ高天閣にたづね來れり
十一時二十分發汽車に乘り一行四人綾部に向ふ
落合氏一行五人も同車して綾部の神苑に詣でんと行く

亀岡驛雨そほちつゝ愛宕山眞綿ちぎれる白雲漂ふ
小北山若芽の綠萌えたちて神の社も深く見えつゝ
新綠の萌えたつ山野を馳せ乍ら園部の驛に流れ入りけり
殿田過ぎ下山和知をのりこえて山家の驛に降る雨はげし
漸くに雨の綾部の驛につけば宣信自動車雇ひて待てり
西門に歸れば宣信兩側に列を正して吾迎へ待てり
傘さして本宮山に上り見れば今を盛りと丹躑躅の咲く
近侍子と躑躅の圓山一めぐりなし了へ擲水莊にやすらふ

五月八日　於教主殿

西石の宮の清庭穉松の植木の數にひろくなりけり

本の宮玉垣清く巡らしてほの暗き迄青葉しげれり

天聲社建増し工事の不風流見るにつけても心ふさがる

工場をいち〳〵巡り信徒の汗する姿に涙しにけり

鶴山の檜の木立揃へむときばさみ持ちてわけ入りにけり

二代すみ子清月吟月恒月と鋸鋏持ちて働く

清々し樹下に筵を敷き乍ら躑躅眺めて辨當ひらく

錦水亭休らひ乍ら池の鯉に麩を與へつゝしばし樂しむ

草臥れて前後も知らず晩景より華胥の御國をたどりけるかな

五月九日　於教主殿

天聲社黃金閣を見廻りて錦水亭にしばし休らふ

今日も亦金龍海の鯉に麩を與へて暫し樂しみにけり

鶴山の神苑今日も鋏持ち枯枝等をはらひけるかな

穹天閣地行工事もはかどりていと賑はしき緑の神苑

新緑のもゆる神苑を眺むれば天津神國のごとくなりけり

町議戰鎬をけづる最中に悠々御山の躑躅見るかな

宣傳の旅を了りて栗原氏伊豆大嶋ゆ歸り來れり

五月十日　於教主殿

朝雨の降りしく庭に立ち出で、しだれの松に袖をぬらせり

さみどりのもゆる木下に佇みて心ゆくまで新空氣吸ふ

多田夫人病と聞きて横町に蒼惶として立ち出で、行く

久しぶり月光閣にやすらひて書棚の整理行ひにけり

雨晴の月光閣に安居して緑の寺山清しく眺めぬ

櫻井氏館を訪ひてしばしの間書畫の話をなして歸れり

高木氏の館を訪ひて床の間の高さ廣さを調べけるかな

第三の宿舍に入りて宮井氏の病の祈願なしにけるかな

神苑の木下の闇を縫ひ乍ら梅田氏邸にたづねてぞ行く

五月十一日　於　教　主　殿

朝まだき庭に立ち出で植込の茂みすかせば廣けく淸し

町會議員選擧せんとて朝七時高木内事壽賀廬同道す

櫻井氏投票終り月光閣に入りて短册百餘枚書く

宮澤氏やかたを訪ひて少時の間庭の景色に見入りたりけり

谷前氏やかたに少時歩を枉げて書畫色紙など開き見しかな

丸山に登りて見れば長生殿穹天閣の地行進めり

丸山の躑躅の花の盛り見てしばし歸るを忘れ佇む

錦水亭に辨當開き茶を啜り夕陽を浴びて居宅に歸る

選擧長東尾吉雄内事長高木氏其他戰况を待つ

刻々に結果如何にと一同は敎圭殿にて詳報を待つ

櫻井氏八十一の票を得て第五位町議に當選なせり

五月十二日　於高天閣

下萠ゆる若葉に朝の風たちて心淸しき綾の神苑

小波のうつ池の面に舟浮けてめぐり遊びぬ大八洲島

昨日まで鎬を削りし町議戰嵐の後の靜けさに似る

午前十時綾部の驛を發車して一行四人龜岡に歸る

綾部驛改築工事の眞最中プラットホームあやふく渡る

宣信徒吾一行を送るべくプラットホームに並立ちて居り

一本木野路に立ちつゝ宣信徒見送る中に蜜柑投げやる

掬水莊庭の面に旗ふりて吾行く汽車を見送る信徒

淙々と和知のせゝらぎ水鏡見つゝ山家の驛に上りぬ

新綠の綠萠えたつ川べりを進めば窓に吹く風淸し

ごう／＼と鐵橋渡れば和知の驛南の山に白雲たちなり

鐵橋を再び渡り山間の道を馳せつゝ下山につく

材木を數多積みたる牛車次々入り來る下山の驛

和知川と大井川との分水嶺胡麻の高地に吹く風寒し

征矢を射る如くに汽車は下り坂世木の殿田の驛に入り來る

トンネルや鐵橋渡り岩見瀬の青淵見れば漁夫の立ち居り

山躑躅花の園部に早や着けば汽車辨當を賣る聲高し

玉の井の里を眞直に鳥羽の里矢を射る如く掘切を拔く

掘切の桑酒看板細くなりて吾汽車忽ち八木驛に入る

小北山麓の屋敷に石を積む人の姿の二つ三つ見ゆ

川關の虎天越ゆれば千原野は限なく晴れて龜山目に入る

大銀杏高天閣もあり／＼と白く光れり初夏の照る日に

月宮殿めぐる青葉の生垣は雲の如くに見え渡りけり

龜山の驛に漸く着きぬれば明光宗匠其他出迎ふ

自動車に手荷物十四箇積み込みて天恩郷に運ばれにけり

風の氣は別になけれど頭痛く鉢巻し乍ら居間に休らふ

明光殿宗匠一同集まりて高天閣に夜目をさらせり
松風園主はる〴〵近江より鮒鮓持ちて訪ね來れり
大祥殿王仁が作品展覧會見乍ら靈界物語きく
月並の冠句や和歌の選をなし天地人軸定めけるかな
吾殿にしのゝめ持ちて稗田野の大石老人訪ね來にけり

五月十三日　於高天閣

珍らしく朝の六時に目を覺まし月宮寶座めぐり見しかな
鈴木氏の言葉もたらし落合氏東京立ちてはる〴〵來れり
近侍子を隨へ月光寮に入り今日も達磨の揮毫なしけり
電光のひらめき渡ると見る内に只一發の雷鳴を聞く
勢至像月光寮より運び來て高天閣の居間に安置す
安生舘炊事場主任呼びよせて並べたてたり小言八百

明光殿宗匠京都の松竹座鳩の如くに往復を爲す

京都より三雲氏來り珍らしき天恩郷の繪襦袢くれたり

五月十四日　於三雲氏邸

新綠の萠ゆる神苑に家鷄の聲雀ゆたかにうたふ朝かな

アカシヤの並木の林青々と梢にみどり萠え立ちにけり

吾留守に植ゑし西山松の木は惜しくも二本枯れはてにけり

釋南樹花萎れたる鉢植を庭におろして水を與へし

一株に一つの花のチユーリツプいと珍らしく五つの花咲く

松竹座活動見んと近侍等を伴ひ十時龜山をたつ

龜山の驛に見送る人々に笑顔殘してひた走り行く

窓あけて高臺見れば大公孫樹梢のみどりあつくなりけり

柏原の野路を走れば右左針の如くに苗代延びたり

請田口進めば溪間の清流を矢を射る如く筏下れり

清閑吟蓉恒月中田氏と一行七人京都に向ふ

次々に溪間流るゝ舟筏見下す狀の雅びなるかな

むし暑きトンネル幾何もくゞりぬけ花もあらしの驛に着きたり

新綠の萠ゆる花園驛見れば圓き頭が三つ四つ照り居り

妙心寺輝く甍眺めつゝ汽車は二條の驛に這ひ入る

粟辻氏以下の宣使に迎へられ三雲氏邸に自動車走らす

午後一時過ぎまで三雲氏邸に居て襖屛風に樂書を爲す

松竹座金髮驟動キリストの映畫をしばし眺め樂しむ

三雲氏の館に再び歸り來て湯になど入りてくつろぎにけり

由緒ある出口の柳みどりして牡丹芍藥咲きみちにけり

芍藥や牡丹の花を眺めつゝ酒を汲みつゝまた歸りけり

中田氏をのぞきてあとの六人は三雲氏邸に一泊をなす

五月十五日　於高天閣

朝十時三雲氏邸を立ち出でゝ丹波口より汽車に乘り込む

二條驛來りて見ればプラットに荒川氏他出迎へてあり

新綠の萠ゆる山野を渡りつゝ正午十二時神苑に歸る

シベリヤの事に關して牧野博士吾に逢はんと待ち居たりけり

廣島縣小山代議士夫妻等と光照殿に面會をなす

園部より奥村藤坂家族四人久方ぶりに訪ね來れり

穴太より上田和市氏訪ひ來り吾知らぬ間に歸りてぞ行く

鎭國の額面製作完了し表具師京都ゆ運び來れり

五月十六日　於東海別院

昨夜の雨隈なく晴れて朝霧の愛宕の峰に高くかゝれり

寢心地のよき明光殿を立ち出でゝ高天閣にしばし休らふ

別院の開院式に臨まんと七時の汽車にて龜岡驛たつ

見送りの人と笑顔を交しつゝはやぶさの如松原を過ぐ

保津川の清き水瀬を追ひ乍ら汽車は嵯峨野に流れ入りけり

よき人の其處邊に居ぬかと嵯峨の驛過ぐれば物言ふ花園の驛

布袋竹や熊蜂二錢銅貨つれ二條の驛を四人突破す

大夫はんの裲襠姿の島原を過ぐれば忽ち丹波口驛

丹波口三雲大夫はん乘り込みて七條驛に粟辻出迎ふ

御尤も大夫はん初め宣信徒京都驛に出で迎へ居り

御尤も三雲大夫はん加はりて一行こゝに六人となる

大和博士北村隆光中村はる子外に三十一人見送る

高瀬川鴨川渡り逢坂の關路を後に大津に着きけり

屁の音は大津臭ひは草津驛天の眞奈井のせんち見てゆく

米原も屁も大垣岐阜々々とつまつてゆけば一の宮驛

一の宮驛より急行乘りかへて稻澤驛に漸く下車せり

稻澤の驛より自動車馳せ乍ら東海別院大門につく

いや廣き庭の若葉のかをりつゝ心淸しき東海別院

東海別院開院式も相濟みてまめ人達に面會を爲す

信徒に與へん爲と繪短册二百有枚筆染めにけり

玄關に階段作り信徒と記念の小照撮りにけるかな

庭の面の檜の木の皮をむき乍ら心淸しく半日過せり

浪速節都々逸靈界物語爪彈々琴餘興ありけり

新しき湯殿に入りて一日の旅の汗をば流しける哉

停電にたちて卯月の八日月仰げば夕風袖にかをれり

○聖師樣東海別院開院式御臨塲日記

京都　粟辻忠造

五月十六日　曇天

聖師樣には東海別院開院式の爲午前七時二分龜岡驛御出發、隨行は慰月、明月、閑月の三宗匠にて御機嫌麗し。列車が二條驛に着せし時の迎送者左の通り申上ぐ。

中村良春、四方瓢壽、四方芳子、坂本龜吉、南カネ子の各宣傳使、外一名同驛より御同車

丹波口驛よりは北村隆光、三雲孝春兩宣傳使、及本由太外三名同車御見送りせらる。七時四十五分列車が京都驛に着せし時京都より粟辻、三雲夫人御供の御許しを頂き一行に加へさして頂く。同驛には

大和博士、井上莊三郎、北村隆光、中村、三雲、荒川、四方、伊賀、前西、大塚、坂本、

各宣傳使、粟辻まさ、南夫人、上田タケ、田村京都婦人會員其他數名合計卅三名の迎送者あり、八時十五分東京行にて御發車あり、車中滿員にて隨行員は立往生す。聖師樣には大阪パックを御覽になり、御機嫌麗しく時々車窓より外の風景を御覽になり種々の御話あり、米原驛にては米倉忠七氏東京への歸途同車す。十時五十五分尾張一の宮驛御着、同驛にて急行列車を待避中の普通列車に御乘換遊ばす。同驛には櫻井東海別院管事、鈴木名古屋分所長、山﨑つね子、中野房太郎、大宮守道の各宣傳使及櫻井秀之丞氏御出迎ひありて同車せらる。米倉忠七氏は同驛にて御別れせらる。午前十一時六分稻澤驛御下車、同驛プラットホームには多數御出迎ひあり。

聖師樣には櫻井氏邸より差廻しの自動車にて十一時十一分東海別院に御着、上機嫌にて御少憩。同院には一城稻澤支部長、小池大榮、荻原品吉氏等準備の爲詰め切らる。

聖師樣には御疲れもなく櫻井管事の御案内にて鈴木名古屋分所長始め左の諸氏に御面會遊

ばさる。

谷口ゆき子、同せつ子、同あき子、同稍男、同皓男、同儒男、中野房太郎、増田金兵衞、岸彦三郎、大宮守道、伊藤菊次郎、深谷政行、山﨑つね、水野貞弌、黑坂邦雄、大宮さだ子井上太一郎、杉村治謙、鈴木すみ子、増田よし江、同ゆき子、桔梗周郎、高柳眞佐一郎、同ます子、岸政吉、同すみ子、同ぎん子、同みさほ子、同みよ子、水野じゆう子、同孝、深谷千代子、同文子、同時彥、増田彌平、櫻井秀之丞、同じよう子、山下末吉、淸水竹次郎和田なみ、野本ひで子、大鹿增治郎、吉田かぎ、同よし子、同力次郎、西脇豊照、野田治太郎、木下彥三郎、中野銈、南鏊、同芳江、同文子、同惠三、谷口淸濤、柴田鈴子、安藤たま、同せつ子、伊藤すゑ、櫻井みね子、城東支部太田秀穪、櫻井慶太郎、北原祭一、同たみ子、鈴木鹿三郎、內藤安次郎、同とく、同慶光、松原誠道、同きぬ子、同儀三郎、鈴木重次郎、片岡賢次郎、堀田たか、加藤幸雄、稻澤支部長一城溪三、同信者一城たつ子、野口德

次郎、東野榮次郎、同次郎、同光太郎、同正喜代、大島善十郎、同宗一、同萬三郎、村瀬福三郎、佐々和吉、木全松三郎、夫馬三太郎、豊橋支部長伊藤眞雄、碧海支部長市古濱吉、半田支部長江本立吉、多治見支部長古田初九郎、同信者古田千代子、荻原品吉、小池大榮牧豊藏、北村千代子、同大孝、同倫男、荻原ゆき子、島田正次郎、北村芳枝、古田政次郎安藤大治、久々利支部石井藤吉、宮島金吾、加納錄平、石井懇、岐阜支部長木村研一朗、同信者木村てる子、松島支部長森花明彦、同信者森勇、森まつの、同直子、三重支部長太田太三郎、伊藤明緒、桑名支部長加藤覺十郎、伊藤甚太郎、員辨支部堀田宗吉、引本支部小林久子。

十一時三十五分より聖師様には別室にてお横におなり遊ばされた。別院にては御座敷の縁側に新しく欄干附の縁が取設けられ、又浴室及便所も新設され、實に立派に出來上つて居た聖師様には櫻井管事を召され觀音様及みろく様の御軸二十枚を御下渡しになつた。倘當別

院の管轄（愛知、岐阜、三重縣の一部及靜岡縣の一部）に就き御言葉があつた。御下げになりしお軸は櫻井別院管事、鈴木名古屋分所長及城東、稻澤、豐橋、松島、碧海、半田、多治見、久々利、岐阜、三重、桑名、員辨の各支部長が戴かれた。聖師様には十二時四十分御晝食遊ばされ直ちにお休み遊ばさる。東海別院櫻井家の神床は新築せられ眞に立派になつて居る。聖師様には午後一時頃より少々御苦しみ遊ばされ、明月、閑月兩宗匠は靈界物語を拜讀申上げ其間に御熟睡遊ばされた。三時十五分お目ざめ果物などを召上り、左の諸氏に御面會遊ばさる。別院櫻井信太郎、同もと子、同れい子、同きく子、同みなと子、笠原ちづ子、山田龜造、同芳松。

三時四十五分より庭園内御散策ありて檜五本の御手入れを遊ばされた。

三時四十五分、別院開院大神様御鎭座祭行はる。齋主管事櫻井信太郎、齋主補鈴木治明、神饌長大宮守道、膳部荻原品吉、祓主增田金兵衛、降神司伊藤眞雄、昇神司夫馬三太郎、大麻司